
ただ、それだけ。

藤鷹さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ、それだけ。

【Nコード】

N0991W

【作者名】

藤鷹さくら

【あらすじ】

妾腹であり母を亡くした第三王女は人知れず王城の片隅で暮らしていた。文字は読めるが、礼儀作法などの王族としての教育はほとんど受けていない。リテイシアはそんな自分の境遇に不満を感じてはいなかった。

だが、ある魔法使いとの出会いが彼女を目覚めさせる。愛したくて、愛されたい。

一話

荒野に住居を構える魔法使いは思いを馳せる。そう遠くない昔のはずだが、失ってしまった今では遠い過去の事に思えることについて。

人知を超える魔力を手にし、孤独な魔法使い。膨大な魔力の影響で常人とは時の流れが違う体になってしまった彼が心を許した“人間”は二人のみ。

最初は女性で無償の愛で魔法使いを包んだ。柔らかい歌声を聞き心安らかに眠っていた時期が、当然彼にもあった。

次も女性で春風のような安らぎを与え、また、可憐な童の様に彼の生活に彩りを添えてくれた。

その二人も、魔法使いの側から離れていってしまったのだが、引きとめることは無かった。

彼は腕の中にある読んでもいない本から視線を反らせ、ふと口の端を歪める。感傷などらしくもないと、何時から切っていないかさえ曖昧な髪に触れた。いま手にしているのは興味があるから取り寄せた資料だったが、少し目を通してみれば彼にとっては分かり切っていることしか記されていないかった。彼は貪欲に知識を求めるが、新鮮な驚きを感じたのは大分昔の様に思う。彼の予想に反した行動や事実というものは、存在しないのではないかと思えてしまうほどに。

魔法使いは音の無い部屋で瞳を閉じた。

賑わう市場。

市場と言つものはその国を表すというが、得てしてそうだろう。バージャー王国は一部を除き土壌が豊かとは言えない土地が多く存在しており、夏は乾燥し冬は雪が多い。なので芋類が良く育ち、食べられている。また、自生する植物は森林ではなく草原になるのでそれを利用した放牧が行われており、羊と牛が主にあげられる。そして、国の西と東の両脇を山が迫っているので、旅人が多く見かけられるのも特徴だ。なので、宿などの施設が充実している。宿の経営で生計を立てている人物も多い。

国民性はしたたかで開放的ではあるが、その反対に自国の者に対しての情が深いと言われている。人の入れ替わりが激しいので、変わらず一緒にいる者に対して親しみを覚えやすいというわけだ。

また、市場に並んでいるのは防寒に関するものが多い。今の様に季節が秋で冬前だと特にだ。また、色々な珍しいものが手に入るとしても知られている。

「おかみさん！ これ、いくら？」

そう尋ねたりティシアは生まれも育ちもバージャー王国だ。燃える火の様に明るく真っ直ぐの赤毛に、長くのばされた前髪から見えない。身長は平均より高く、その所為か体が薄く十五歳だというのに凹凸は殆ど見られない。人によっては、長くのばされた前髪と体つきを見て勝手な判断をし、沢山のおまけをくれたりする。

肌は少々の日焼けはしているが白く、手には畑仕事をする者にみられる“たこ”と傷がある。

リテイシアは、最近有名になった味の良い南瓜の種を指さしていた。それをみたおかみさんは明るく答える。

「そつだねえ、まだあんまり出回っていないし、一袋で銅貨十枚だねえ」

それを聞いたリテイシアは少し考えた。そして、胸元にある財布を軽く押さえ、おかみさんを見る。

「流通するまであともう少しよね？ だったら、待つわ。今すぐ必要ってわけでもないし」

おかみさんは少し焦る様子を見せる。あまりにあっさりといひいたので、拍子抜けしたのだ。リテイシアは淡々と続けた。

「それじゃあ、また来るから」

その場を去ろうとした彼女をおかみさんはひきとめた。少しでも高く売れる今の時期に売っておきたいというわけだ。

「品が無くなってしまつかもしれないよ？ それなら、今買っておいた方が良いんじゃないかい？ 本当に味が良いんだ」

リテイシアは足を止め、種を手にとり考えるそぶりを見せる。

「じゃあ、ほかにこれも買うから合わせて銅貨十枚にまけてもらえない？ じゃないと、買えないわ」

その言葉におかみさんは東の間考えたが、明るく了承の意を伝えた。そして、リテイシアの差し出した銅貨を受け取り、種を彼女の差し出した皮袋に入れる。

「本当にあなたには敵わないねえ」

そう言っているが、おかみさんの明るい口調が彼女に好感を抱いていることを表していた。ふくよかなおかみさんは商売熱心ではあ

る人がよく好かれている。リテイシアも彼女を好ましく思っている
ので、嬉しそうに返した。おかみさんがおまけしてくれた分を成
長してから礼としておすそ分けするのは、二人の間では良くあるこ
とだ。

「おかみさんにそう言ってもらえるなんて、光荣だわ。上手く育つ
たら、おかみさんにもおすそ分けするわね」

そんないつもの会話を交わして、リテイシアは他の場所へ移動す
る。顔見知りが多いのでほうぼうで声をかけられ、全てに言葉を返
すのでなかなか進まない。

だが、その中の誰も彼女がどこに住んでいて、家族が何人いるの
か知らないのだ。何度か探りを入れた者はあるのだが、どこかのお
屋敷に仕えていると言ってそれ以上を語らない。どんなに口のうま
いものが尋ねてもそうなので、最近ではそんなことをする者も滅多
にいなかったりする。

顔を隠す様に長い前髪から見え隠れする瞳がまっすぐで、リテイ
シアが何者かわからなくても良いと思えてくるからだ。

「それでねえ、王妃様つてのが三番目のお姫様に酷く当たられてい
るって聞いたことがあるんだけど、本当かねえ」

「どうだろうね。お一人だけ王妃様のお子様じゃないんだらう？
複雑なのはわかるけど、もし本当だとしたら可哀想に」

リテイシアの耳が他愛も無い買い物に来た中年の女同士の会話を
捉えた。足を止めて二人を見てしまい、それに気付いた片方　ふ
くよかな女性が言う。

「ああ、シアじゃないかい。お前も聞いたことがあるかい？」

シアとは彼女の愛称だ。

「いいえ」

軽く首を振りながら言ったりリテイシアに、もう一人の細い体つき
の女性が嬉しそうに口を開く。王族といえば、雲の上の存在だ。責
任の無い噂話をするには丁度いい題材である。酷い中傷にならない
限り、見咎められる事も無いのだから。

「そうなのかい。じゃあ、教えてあげるよ」

話すことに夢中な彼女は、リテイシアの表情が曇ったことに気付
かない。そして、リテイシアも敢えて止めようと思わないのだ。

さて、彼女らの話を要約すると……王には愛人がいたのだが、そ
れに嫉妬した王妃が愛人を毒、または精神的に追い詰めて殺してし
まった。だが、その愛人は子どもを産んでおり、王の血をひくので
流石の王妃でも手出しが出来ない。それでも、その子ども 第三
王女が憎くてたまらず粗末な服を着せて使用人の様にこき使ってい
るらしい。この国では正式に世継ぎとして認められた者でなければ、
王妃以外の産んだ子供であっても王妃が管理するのだ。なので、王
は口出しが出来ず、可哀想な第三王女を見ているしかないらしい。

それを聞いて、リテイシアは笑ってしまった。憶測ばかりだし、
まるで。

「何かの物語みたいね」

その言葉に、楽しそうに話をした二人も笑ってしまう。全くその
通りだ。

「そう言われればそうかもしれないけど、偉い人っていうのは私た
ちの想像もつかない事をやるもんだからね」

「私だったら旦那が愛人を作った時点で家を出てやるよ。王妃様だ
とそうはいかないだろうけどさ」

「愛人なんて、金が無いと持てないからうちの旦那もあんなの旦那
も到底無理さね」

「そりゃそうさ」

そんな二人のやりとりを聞きながらリティシアはまた笑う。その笑いの真意は分からない。二人は自分たちの会話を聞いて笑っているのだらうと思った。彼女の心の内も知らずに。

そして、頃合いを見計らってリティシアはその場を後にした。

彼女はそれから買い物を終えると、人目を気にしながらどこかへ向かった。歩いて、歩いて、歩いて。彼女がたどり着いたのはバージャー王国の城 即ち王の住まいである王城 の近く。そして、人気の少ない場所を堀ぞいに歩きはじめた。

目的の場所には、人が一人通れる程度の穴が開いており、彼女はそこから城の敷地内に入るのが目的だ。穴の前に到着すると、荷物を先に穴から中へ入れ、彼女もそこに体を通した。そして、人目を気にしながら歩きはじめた。次に彼女が向かったのは城の敷地内ではあるが、忘れられたような場所であるのは小さな畑と粗末な小屋と井戸のみ。

どうしてそんな場所へリティシアが向かうのか。

何故なら彼女は、そこに住むことを王妃から命じられた第三王女であるからに他ならない。

二話

「本当に目障りな娘。あんな娘が第三王女だなんて、この国の恥でしかないわ」

この国の王妃　サルリア・バージャーは言った。二人の娘を産んではいるがまだ三十路を少し過ぎたばかりで肉体に崩れは見られない。

見事な金の巻き毛に碧眼の傲慢な美女は、豊満な肢体を豪華なドレスに包み、良く手入れされた爪で座っているソファの皮を押さえつけながら紅唇を戦慄かせ、目の前に立つ自分の兄を見る。

「本当に首尾よく進んでいますの？　あの娘を他国の貴族にやつてしまえるのよね？」

確かめる様な口調。だが、それに否という言葉は許されない。同じ内容の言葉を毎日の様に口にする妹に、最近爵位を継ぎ公爵になった男は、薄笑いを浮かべ言った。

「ああ、義兄上を上手く丸めこんだよ。三女からだというのが難しかったが、あちらが是非にと言っていると申し上げてな。すぐにも動きだせるだろう。漸くですよ、王妃殿下」

兄の言葉にサルリアは、血の様に赤い唇を歪めて笑う。それはまるで欲しかった玩具が手に入って嬉しくて堪らない子どもの様に。

そんな妹に釣られたように、兄も笑う。二人しか存在しないその部屋には、各々の欲望が渦巻いていた。

城の端に誰からも忘れ去られた様な場所に建てられた小屋には二

つしか部屋が存在せず、必要最低限の物しか置かれていない。それがリティシアの住まいである。王家には珍しい赤毛を一つにまとめ、畑を耕していた。食事を自力で調達しなければいけない彼女は色々な所で知識を得て、今では立派な作物が実るほどになっている。

この国では金髪が好まれており、王家の者は九分九厘金髪だ。王妃になる第一条件も金髪である事だと言っても過言ではない程に。

街での噂通り、リティシアの母親は正妃では無い。母親は既に亡くなっているが、国王の側室であった。なので、王妃であるサルリアに疎んじられこんな城の端に住まわされているのだ。この国のしきたり通りに王妃に管理されていた。それでも、生母が存命中は彼女が娘を守っていた。だが、亡くなってしまつては、誰もリティシアを守つてはくれない。そんな状況にもめげずに生きてきたリティシアの瞳には、炎のような激しさが隠れているのを知る者はいなかった。

畑仕事が一息つくとリティシアは、小屋に戻つた。すると、そう広くない室内なので入口で全てを見渡せるのだが、机の上にある果物と銀貨と銅貨が目に入った。時折、こういうことがあるのだ。差し出し人は不明だがリティシアは有り難く頂いている。ただ、置いてある金額はリティシアには多すぎるので今では結構溜まつてしまつていたりするのだが。

顔を見せてはくれないが、孤独な城で自分を支援してくれる者がいるのは素直に嬉しい。

ただ、本当は硬貨よりも、話をしてくれる方が嬉しい。その旨と感謝の意を伝える手紙を置いておいたことはあるが、それが持ち去られることはあつても返事が来たことは無い。身分を明かせない人物なのだ。今ではそう納得したが、毎回手紙の返事を期待してしまふ。

しばし温かい気持ちに浸っていたリティシアだったが、小屋のド

アを叩く音に一気に現実に引き戻された。

「殿下。いらっしやいますか？」

感情のこもらない男の声。何かあったのだらうか。リテイシアがドアを開けると、二人の兵士が立っていた。彼女の姿を確認すると、敬礼をした。

「何かあったの？」

「国王陛下がお呼びです。御同行を」

父が自分呼び出すなんて、年に一回もない珍しいことだ。リテイシアは不審に思いながらも大人しく従った。

「何のご用でしょうか、お父様」

リテイシアはなるべく平静に、と自分に言い聞かせながら尋ねた。低頭しているので、表情は見られまいがいつ顔を上げても良いようにしておくべきだ。

珍しく彼女は怒っていた。なぜなら……。

あれから、兵士に城内へ連れられたリテイシアだったが、城のある部屋に連れられ今まで着ていた服を脱がされ、高価なものを着させられた。それが終わったかと思えば、何の説明もなく王の執務室へと通されたのだ。そこには高位の者たちが並んでおり、リテイシアは何が何やらわからぬ状態でこの場にいる。前髪を切られそうになったり化粧を施されそうになったが、その時には我に返っていて抵抗したので、服以外は変わっていない。

風呂にも入らされそうになったが、それももちろん抵抗した。普

通の姫君は一人で湯浴みは出来ないだろうが、リテイシアは普通に育っていない。人に肌を擦られるなど、歓迎するはずも無かった。それでも従う気配が無いと知った侍女は、そのままリテイシアを彼女の父である国王の前まで案内した。侍女の殆どの物がリテイシアを侮り同じくらい気味悪がっているのを彼女は知っている。

とにかく、リテイシアは父王の言葉を待っていた。早く小屋に戻って作業の続きをしたい。

「お前には……悪いのだが……」

言いくそくに切り出す国王ロベルト。王妃が見かねたのか続けて言った。

「お前に婚約者が出来ました。用意は出来ています。今すぐ出発なさい。ああ、顔を上げて下さいわよ」

今気付いたかの様に許され、漸く顔を上げることが出来る。第三王女だと言うのにあまりの扱いだ。

「婚約者、ですか……」

復唱するリテイシアに、サルリアは優しい声音で続けた。

「隣国の貴族が貴方を是非にと仰られたのです。良く仕えなさいね」

有無を言わさぬ響き。リテイシアは是と言うしかなかった。元より拒否権は無いが。

王妃の言葉が終わると、それが合図とばかりに引つ立てられた罪人の様にリテイシアは外に連れて行かれた。そして、いきなり馬車に押し込まれる。彼女自身が用意をする時間は与えてもらえないらしい。馬車自体の乗り心地は良いので、腰が痛くなることはなさそうだ。諦めることに慣れてしまった第三王女は文句を言わずに、馬車に収まった。

これで自分の残りの人生は決まってしまった。ろくに礼儀作法も身につけていないので、厭われることになるだろう。それが国の恥になるかもしれないが、先方がリテイシアの境遇を知らないわけではない。ただ、相手は他国の姫が嫁いだという事実が欲しいのだろう。そう思った。

リテイシアはそう結論付け、規則的に揺れる馬車の中で静かに瞳を閉じた。

三話

「前髪を切っては駄目よ。顔を隠すために伸ばすの。わかった？」

大好きな母　　ミリティアがそう言つて柔らかく微笑んだ。リテイシアはこくこくと頷く。すると、ミリティアは良い子良い子と頭を撫でてくれるのだ。彼女の顔には大きな太刀傷があり、その所為で顔の皮が引きつっていた。だが、リテイシアは母の微笑みが好きだった。

リテイシアは母といるときだけ前髪を上げることが許されていたので、彼女の顔を一番よく覚えている。前髪があると、視界が狭まるからだ。

顔の傷の所為で醜女と蔑まれていたミリティアは、自身の娘にこう言つて聞かせた。

「リテイシアの顔はね、人に見せたら駄目なのよ」

その言葉の所為で、娘が「自分は醜い」と認識をする事になるとは母である彼女は考えなかった。お陰でリテイシアは年頃だというのに、まともに鏡を見たことが無い。鏡を見るときは、前髪越しにちらちらという毎日だ。だが、母である彼女とて娘と共に過ごす時間が短いものになるなどと想像していなかった。リテイシアが成長する過程で色々と伝えていこうと考えていたのだ。

リテイシアは馬車に揺られながら懐かしい昔のことを思い出していた。大好きだった母がまだ生きていた時のことだ。床に伏せつきりだったが、自分を沢山、話をしたりして遊んでくれた。幼い頃から、憧れも目標も彼女ただ一人。街の皆は親切にしてくれたが、隠

し事をしているといふ引け目から一定の距離を感じずにはいられなかった。

出発から休まずに走り続けていた馬車が急に止まったのは、懐かしい気持ち自然にリテイシアを微笑ませたその時だった。唯一、馬車内にいる侍女が自分に近づいてくる。彼女の感情の無い瞳がリテイシアに恐怖を与えた。

「どうしたの？ 何？」

馬車の端まで寄って、身構える。侍女に害意があるのは、明らかだ。咄嗟に扉を思いきり押し、外に転がり出ると光る物を持った大勢の男たち。リテイシアは覚悟を決め、立ちあがった。震えそうな体を心の中で叱咤し、辺りをゆっくりと見渡す。丁度この国で唯一、水源に恵まれない場所にいた。人の姿は無く、暗殺にはもってこいの場所だろう。

立ちあがったりリテイシアに男たちは一瞬躊躇ったが、一歩踏み出した。

「お母様……」

リテイシアが小さな声で母を呼ぶ。その時だった。突風が吹き荒れ、砂嵐に目を開けていられなくなる。思わず後ずさると、腕を掴まれた。もう終わりかと振り向けば黒衣の男性の姿。手には何の武器も無い。

この男に自分は首の骨でも折られてしまうのだろうか。

「目を瞑れ」

男性が低い声で短く言ったのを聞いて、リテイシアはそれに従った。本能的な行動だった。

だが、予想外の事に次の瞬間に彼女は、今まで体験したことのない浮遊感に襲われた。死んでしまふとこの様な感じになるのだろうか。

か。暗闇の中で自問自答しているとそれが治まり、また同じ声で「開けても良い」と声がした。それに従うと信じがたい光景が広がっていることに気付く。何故か、リテイシアはどこかの部屋の中にいたのだ。見えるのは、簡素な椅子と机のみ。絨毯は色褪せているが清潔な印象の部屋だ。部屋の中にいるのはリテイシアと男性だけ。

「此処……どこ？」

思わず出た呟きに、男性は眉を寄せた。面倒くさい物を拾ってしまつたと、後悔する様に。

男性は闇に紛れ癖のある長い黒髪を無造作にまとめ、リテイシアを睨んでいた。不機嫌そうな翠の瞳が、彼女に向けられている。筋の通った鼻梁に切れ長の瞳の端整な顔立ちをしていると思うのだが、浮かべている表情が仏頂面なのでそれを隠していた。勿体ない。恵まれてるのにそれを活用しないなど、恵まれていない者に対する嫌味でしかない。リテイシアは独り言ちた。だが、それに気付かなかつたのか男性は一言だけ、簡潔に答える。

「俺の屋敷だ」

「そうですか……」

あつさりと言われ、リテイシアはそう言うことしかできない。だが、すぐ我に返ると男性を正面に見据え、口を開いた。

「私を助けてくれたんですよね？　ありがとうございます」

容姿から察するに、二十代半ばだろうか。どう見ても年上であるし、先ほどの恩もあるので敬語で礼を言う。

「礼を言われる程の事じゃない。それで、お前はこれからどうするんだ？」

無愛想に良いながら、男性は椅子を机の下から引き出した。座るのかと思って見ていると、リテイシアを見返してくる。

「座れ」

簡潔にそう言っただが、それであっさり座ることが出来るお姫様に育っていない。

「一脚しかないんですから、貴方が座ってください」

「良いからお前が座れ」

見つめあう二人。根負けしたのはリテイシアの方だった。厚意は有り難く受け取っておこう。

「厚意は有り難く受け取ります。けれど、椅子は一つしかないんですか？」

改めて、部屋を見渡せばまた簡素なベッドがあった。

「貴方はあそこに座ってください」

言いながら、椅子を異動させる少女に男性は素直に従った。シートも何もない木のベッドに腰掛け、足を組みリテイシアを見る。あのまま立って話されていたら叱られているようだったろう。

続いて、リテイシアも椅子に座った。

「どうするんだと言われても、私を助けたのは貴方です。貴方が決めてください。気まぐれで助けたなら、このまま屋敷を追い出してもらって構いません。それから私がどうなるかと、興味が無いはず。私に行く所が無いとわかっているんでしょう？ これ以上、私を助けるつもりが無いのに、どうするか聞くななんて悪趣味な事をしないでください」

強気な発言だが、リテイシアの瞳は揺れていた。男性はといえば、虚をつかれたかのように彼女を見つめている。気を悪くしてしまっただらうか。リテイシアは再度、口を開いた。

「礼儀知らずだと言われても仕方が無いと思いますが、私はこれから此処を出たら生きるか死ぬかの生活が待っているんです」

リテイシアの選択肢に、王城に帰ることは無い。折角出ることが出来たのだ。可能な限り足掻いてみたい。

「私はお前を外に放り出すほど非道では無いつもりだ。お前が望むのであれば、この屋敷の部屋を一室、お前の物にしても良い。私が一人で暮らしているようなものだから、気兼ねもないだろう」

男性の口から出た言葉は、リテイシアの想像からかけ離れた言葉だった。今度は、彼女の口から言葉が出なくなる番だ。男性はリテイシアの返答を急かすような真似はしなかった。

リテイシアが返答するまで、結構な時間がかかった。だがそれを聞くと眉間に皺が寄ってはいるものの、声が先ほどまでより低い気がするものの、男性はこう言ったのである。

「そうか。では、着いてこい」

小さく頷き、発された言葉は短い。おもむろに男性は立ち上がり。

「おい。何を惚けている」

遂に不機嫌な声でこう言っつて、リテイシアに少しの恐怖と先ほどの出来事から尊敬の念を覚えさせた。

四話

「私の名前はマオラスだ」

男性　マオラスに案内された部屋は意外にも整っており、シーツやドレッサーといった家具や小物が可愛らしかった。いつか取れなくなってしまうような眉間の皺を浮かべている彼に似合わない女性らしい部屋だ。

笑ってしまいそうだった時に冒頭の台詞を唐突に言われ、リテイシアも慌てた。名乗られたのだから、自分も名乗らねば。だが、馬鹿正直に本名を名乗るようなことは出来ない。でも、多少は親しみがないと反応を忘れてしまいかもしれないので、町での愛称を名乗ることにした。

「私はシアです。マオラスさん。私はこれからどんなことをすれば良いんですか？」

先ほど、リテイシアはこの屋敷に滞在する代わりに何か仕事を与えてくれと言ったのだ。それを、マオラスは了承し、今に至る。

「私に極力構わずに、屋敷を掃除しろ。私の部屋には入るな。わかっただな？」

同じ内容の言葉を二度言われてしまった。リテイシアが何か言う前に、マオラスは続ける。

「食事はこの近くの階段を降りたらすぐある食堂で取れば良い。私は私で勝手にするから、お前も勝手にしろ。あと……」

「なんですか？」

「その言葉遣いをやめろ。私に気を使う必要は無い。名前も呼び捨てにしろ」

「淡々と言われ、建前で無く本気で言っていることがわかる。」

「わかったわ、マオラス。これで良いのね？」

「ああ。……ん？」

マオラスの手が、彼女の顔に近づいてきた。咄嗟に顔を背ける。折角助けてもらえたのに今、醜いと知られたら追い出されてしまうかもしれない。彼はそんな彼女の行動に別段何も言わずに手をひっこめた。

「それでは、私は自分の部屋に戻る。部屋にある物は好きにして良い。気に入らないものがあれば捨てる。欲しい物があれば言え」
マオラスはそう言うと、さっさと部屋を出て行ってしまった。早業だ。

リテイシアは一人になった室内を改めて見渡した。部屋の中には備え付けの衣装棚に、可愛らしいドレスサー。部屋の中央には、白を基調としたシンプルながら少女の心をくすぐるデザインを施したベッドが堂々と配置してある。それなりに高価で、住みやすそうな部屋だ。リテイシアには些か、可愛らしすぎたが。手入れも行き届いており、埃がつかもっているということも無い。誰かが使っている部屋なのだろうか。そんなことは考えても意味のないことだ。

「じゃあ、一回、このお屋敷を見回ってみよう」

荷物というものが無い彼女は、それを整理が必要が無い。なので、思い立ってすぐ部屋を出て行った。

一階にはそこそこの広さの食堂と風呂、書物庫と家事室があった。二階には部屋が二つと倉庫。一つ一つの部屋がかなり広い。三階は

あるようなのだが、階段はそこから絨毯の色が変わっていたので足を踏み入れるのは遠慮した。風呂や食堂や、使っていないであろう部屋はそれなりに掃除が行き届いており、他の人間の存在を疑ってしまう。

「埃が全然、積もって無いのよね……」

今すぐ掃除を必要にしている部屋が全く見当たらないのだ。それより、重要なことに気がついたのだが、彼女には着替えが全くない。先ほど、マオラスは欲しい物があれば言えと言っていたが、自室にいるであろう彼を探し出して着替えを要求するのは何だか恥ずかしい事に思えた。本当に自分には何も無いという事を実感し、リテイシアは少し羞恥を感じる。

着替えの事を考えていると、荒地にいた所為で肌が埃っぽいことが気になりだした。そうならば、当然湯を浴びたくなつたが、ぐっと堪えた。

それから、何もすることが無い状況に慣れていない少女は、与えられた部屋に戻ることにした。

部屋に戻り、何の気なしに備えつけの衣装棚を開けてみれば、彼女に丁度良いサイズの服が沢山あった。少し裕福な家の娘が着る様な物ばかりで、部屋着にも近所にお茶を飲みに出かけてもおかしくないものだ。そして、驚くことに新品の下着もあり、与えられた部屋にあったのだから構わないだろうと有り難く拝借することにした。

浴室は結構広かった。寒々とした印象を与えるほどに。

浴槽には最初から湯がたまっていて、リテイシアを驚かせた。汗を流し、浴槽に浸かっていると、体の疲れが消えていくような感覚を覚えた。普段は体を拭くだけか、気温が高ければ水を浴びるだけだった。湯を浴びるのは久しぶりだ。

それにしても、こんな生命の息吹が感じられない場所でこんなふ

んだんに湯を使う事が出来るのはどうしてだろう。そんな疑問が思い浮かび。湯船の中でのんびり考えていると、思い当たる答え。これが魔法というものなのだろうか。

この国の民にとっては一般的に魔法やそういった類なものが、畏怖の対象なのだ。開放的なお国柄ではあるが魔法という異質なものに関しては違うようだ。それはこの国の歴史に関係があるのだが、リテイシアは母親の影響で違った感覚を持っている。

「お母様が言ってたもんね……。魔法は素敵なものだった」

母親であるミリティアは事あるごとに、魔法の素晴らしさを彼女に言っただけで聞かせた。無闇やたらと恐れる必要のあるものではない事や、他の国では国民全員が息をするように魔法を使ったりする事をバージャー王国は旅人が多い国なので商業が発達し、魔法の発達が遅れてしまったのだと言っていた。そんな国にわざわざ住むなんて、マオラスは相当な物好きなのかもしれない。もしかすれば、彼は魔法使いではないのかもしれないが、こんなに魔法が使われた屋敷に住んでいるのだから、充分な物者好きの様に思える。

「そうじゃないと、私を助けたりなんてしないか……」

独り語つ。顔の半分を湯に沈め、体を伸ばしながら息を吐いた。濡れた手で前髪をかき上げる。余りの気持ちの良さに、歌が聞こえてくる様な気さえしてきた。夢でも見ているのだろうか。

「って、そんなわけない」

リテイシアは我に返った。耳をすませば、脱衣所に誰かいるようだ。マオラスだろうか。彼は昼間から歌いながら風呂に入るような人間には見えなかったが、人は見かけよらない。見られてもどうと云ったことのない体だが、一応、伝えるべきだと思いい口を開く。だが、時すでに遅しで、湯気で良くわからないが人影が見えた。

「あの、います。着替え、置いてあつたでしょ？」
だが、聞こえたのは想像と違う明るい声。

「え、女の子!? 凄い! 凄い! あいつもやっど……」

テンションが高い男性だ。リテイシアは身構えた。出来るだけ浴槽の端に寄り、距離を取って目を凝らす。

水音がした。音から察するに男性は、体を流してもしたのだろうか。リテイシアが考えていると、湯船に波が起こった。

「お邪魔するぜ?」

爽やかに言い、男性は近くに寄ってきた。といつても、手を伸ばしても届かない距離を取っている。それでも、顔を見るには充分過ぎる距離で、リテイシアには彼の顔がはっきりと見えた。

濡れてしまっている茶色く短い髪に手をやり、緋色の隙の無い猫の様な瞳がリテイシアを見ている。湯の色が乳白色だった事に感謝すべきだろうか。本当なら此処で貞操の危機だと抵抗しなければいけないのかもしれないが、茶色い髪の男性は近寄ってこないし、ここにこ笑みを浮かべているだけだ。湯に浸かっていないので見える肩幅は、男性らしくしっかりしている。

「誰?」

尋ねると彼は簡単に自己紹介してくれた。

「俺は朔。マオラスとは親友なんだ。君は?」

「私はシア。今日から此処に置いてもらう事になったの」

人懐っこい笑みを浮かべる男だ。二人とも裸で、此処が風呂場だと言う事を忘れてしまいそうな位に。隙がないと思つた瞳も笑えばそんな印象を与えない。

朔は明るく尋ねた。

「ねえ、君とマオラスとの馴れ初めを聞いても良いか？ 凄く気になるんだ！」

弾んだ声に、リテイシアは隠すことでもないかと口を開いた。だが、詳しく説明すると面倒なので、簡潔に。

「賊に襲われたの。それを、マオラスが助けてくれて、帰る所が無い私を此処に住まわせてくれる事になったの」

朔は口笛を吹き、手を叩いた。

「凄いな！ あ、俺、風呂に入っている場合じゃない。マオラスー！」

突然、立ち上がると朔は出て行ってしまった。慌てて目を反らしたのでリテイシアは精神的な衝撃を受けることは無かった。彼のマオラスの名を呼ぶ声はまだ聞こえてくる。

「強烈な友達がいるんだ。似合わない……」

リテイシアはそう呟いて、風呂を堪能することに専念した。顔を見られる事を厭う彼女なのだが、前髪をかきあげた所為で朔にそれをまともに見られた事に気付かずに。

五話

「マオラス！ マオラス！ 見たぞ！」

慌ただしい足音に声。それに呼ばれた彼だが、完璧に無視して手元の時計に目を向けていた。うるさい男の所為で規則正しく動く金の懐中時計の針の音が聞こえなくなってしまった。

マオラスの部屋のドアが音をたてて開き現れた男を彼は一瞥し、すぐに手元の懐中時計に視線を戻した。

「何の用だ。人の屋敷で騒ぐな。馬鹿者」

「前髪の長いお嬢さん、見たぜ？ この屋敷に女の子なんて久しぶりじゃないか」

その言葉にマオラスは、古くからの友人に体を向けた。その反応に朔は笑みを深め、楽しくて堪らないと言った様子でソファに腰掛け言った。

「困った女の子の命を助けて、自分の家に済ませてあげるなんてどこのヒーローだ！？ どこのキザ野郎だ！？」

「……会ったのか」

「おう！」

元氣な返事に小さなため息を一つ溢しマオラスは、朔を睨んだ。強い眼光にたじろぐかと思いきや、朔はへらへらと笑顔を崩さない。

「睨むなってー！ 照れるなよ」

朔の腕がマオラスの肩にかかる。茶髪の青年は黒髪の青年の耳元で小さく囁いた。

「俺、あの子と仲良くなっても良い？ マオラスが嫌がるなら近づかないけど」

「……構わん。好きにしろ。そして、はやくこの部屋を出ていけ。腹が減っているなら、あの娘に言えば良い。嫌がらずに作るだろう」

「やったあ！許可もらったし、親交を深めてくるかな。じゃあな、マオラス。俺、忙しいんだ」

爽やかに言っただけで部屋を出ていった男を見送り、マオラスはまたため息をついた。静寂が戻ってきた自室はとても落ち着く。

その頃リテイシアはというと、脱衣所で着替えの室内着に袖を通していた。衣装棚から適当に持ってきたものだ。少し古い意匠だが趣味が良い。可愛らしいのだが大人しく、幅広い年齢層が着ることができる。リテイシアは動きやすい実用的な服が好きなのだが、そんな彼女でもこの服には好感を持てた。簡単な話、彼女の好みと一致していたのだ。きちんと保存されていたようで傷みもない。

まだ湿っている髪をそのままにリテイシアは廊下へ出た。前髪がきちんと顔を隠しているかは勿論確認済みだ。

静かな廊下にリテイシアの足音のみが響く。部屋へ戻ろうと階段の一段目に足を置いた時、視線を感じ上を見た。すると、先ほどの青年の姿。一つ違うのは、髪に所々、ハネがあることだけだ。

「よう！」

爽やかに片手を上げ挨拶をしながら、一段一段、下りてくる。リテイシアは踏み出した足を元に戻し、彼を待った。

「こんにちは。貴方はマオラスの友達よね？」

「そうだよ。遊びに来たんだ。少しの間、泊まる事にしたから、改めてよろしくな」

「こちらこそ」

朔が手を差し出した。握手かと思いいりテイシアも手を差し出す。

だが、その予想は外れていて、彼女の手は男の手によって四反回転された。そして、沈む茶色い髪と手に感じる柔らかな感触。それは

挨拶だ。宮廷で紳士と淑女が交わす。経験は無かったが、知識としては知っていた。

驚きのあまり、手を引いてしまい朔を信じられない思いで見つめる。低い位置にある彼の顔が微笑みを浮かべた。

「挨拶だよ。この国に合わせてみたんだけど、俺は君に嫌な思いをさせてしまった？」

微笑みが言葉の最後には悲しそうに曇ってしまったので、リテイシアは慌てて言う。

「びつくりしただけ。初めてだったから」

朔はいきなり立ち上がると、彼女を抱きしめた。服を着ていると隠れているが、意外と鍛えられているのだろう。厚い胸板に顔を埋めることになった。

「そうだったんだ！ 僕が君の初めてか！ 光荣だなあ」

社交デビューする年齢に達するより早く城の端の小屋に移った。

なので、社交といったものからは隔離されて育ったのだ。王妃に厭われ、更に後ろ盾のない彼女に近づく物好きはいなかった。

苦しくなってきたので我に返り、自由な腕で背中を叩いた。すると、腕の力がゆるんだ。

「あはは、ごめんごめん。光荣な気持ちを表そうと思って……」

朔がけるりと悪気を感じさせない声で言った時、上からマオラスの声が聞こえた。

「何をしている。騒がしいぞ」

「あ、マオラス！ どうしたんだ？」

「貴様、ナンパを屋敷の中まで持ちこむな。外でしろ」

「ナンパ……？」

リテイシアが呟くと、リテイシアから離れ階上のにいるマオラス

の元まで駆け寄った朔は大袈裟なと彼の肩を叩いた。

「俺がシアと仲良しだからって、俺が嫌われるようなこと言うなよー。な。シア？ 嫉妬深い男って嫌だよなー？」

朔の同意を求める声と瞳に思わず。

「まあ……」と、返事か何かわからない言葉を発すると、待っていましたとばかりに朔はマオラスに言った。

「シアもそう言ってることだし、嫉妬はやめるよなー！ マオラスも仲良くしたいなら、そう言えば良いんだよ」

話の内容は自分を持ちあげている様に聞こえるが、朔がマオラスをからかう材料に自分を使った事にリティシアは気付いていた。聞いている分には面白いが、自分をネタにされるといっ何とも奇妙な感じだ。

廊下の窓から外を見れば、赤い絵の具を溶いた様な見事な夕焼けが見えた。屋敷が高い位置にあり、辺りに何もなければ太陽が沈む様子が良くわかる。城にいた時は高い城壁に阻まれて、まともに夕日など見たことが無い。出かけることが出来るのは警備が薄くなる夜か朝だけだったから、外で見ることも出来なかった。

そして、夕食に丁度良い時間だ。最初に必要無いと言われたが、一応尋ねてみよう。

「ねえ、じゃれ合いはその位にして話を来もらえる？ 食事にしようと思っただけど、どうかしら」

朔はその言葉にすぐ反応し、リティシアを見た。

「君が作ってくれるのか？」

「ええ、そのつもりだけど大したもののは作れないから、そこだけは覚えておいてもらえたら嬉しいわ」

「マオラスはどうするんだ？」

屋敷の主人は、二人をちらと見て頷いた。彼女はそれがどちらの

意味を持つかわからなかったが、尋ねるより早く朔に肩を抱かれ食堂へ連れて行かれてしまった。食堂についてから、付き合いが長いだろう朔に尋ねる。

「結局、マオラスの分もいるの？ いらないの？」

朔は親しみやすい雰囲気を持った男なので、初対面があだつたということもあってか自分でも驚くほど打ち解けてしまっている。

彼は手を洗いながら答えた。

「きつと、欲しがっていると思うよ。で、俺は何を手伝えれば良いんだ？」

彼に続いて手を洗おうとしていたりティシアは、その言葉を聞いて驚いた。彼女の身の回りには、台所回りを手伝おうとする男はいなかった。王城を出入りする貴族は女でさえ、己の手を汚して料理をしたことが無い者たちばかりだったのだから。

「手伝ってくれるの？」

「もしかして、邪魔？ だったら、消えるけど手伝いたいんだ。皮をむいたりとか出来るからさ」

「いいえ、嬉しいわ。ありがとう。じゃあ、パントリーでどんな食材があるか確認してくるわね」

それから、二人は楽しい会話を交わしながら食事を作った。朔は手慣れた様子で皮をむき、後片付けを手伝った。それについて褒めると、朔は嬉しそうに賛辞を受け取った。

台所は立派だが家庭的な雰囲気を持っている。人が動きやすいが無駄に広くは無く、使いやすい。そうして、出来あがったのがジャガイモのスープに川魚を焼いたもの（これは朔が土産として持参したものだ）と山菜のサラダだ。後、立派な窯があつたのでスコーンを焼いてみた。バターやジャムがあつたのでそれをつけて食べれば良いだろう。料理の品々を見て、手伝った朔は感嘆の声をあげた。

一口にスープといっても手が込んでいたし、魚も上手にやけていた。そんな彼に、リテイシアは吹き出すように笑った。

「普段、どんなものを食べてるの？ 簡単な家庭料理じゃない。お世辞も度が過ぎると失礼になるのよ？」

「そんなこと無いって！ 早くマオラスも呼んでやらなきゃな。きつと、びっくりするぞー」

嬉しそうに言って、食堂を出ていってしまった。盛り付けも済んでいるので、彼女にはする事が無い。なので、そのままマオラスを待つことにした。

それから、少し待てば彼らはやってきた。

食堂にあるテーブルは四人掛けのもので、椅子も四つしかない。マオラスと朔が隣り合って座ったので、リテイシアはマオラスの向かいに座ることになってしまった。何故なら、食事をその様に配置してしまっただからだ。なんだか落ち着かないが仕方ない。二人が席についたのを確認して、彼女も席についた。食事を始める挨拶を済ませ、食事が始まる。

食事中の会話は主に朔がマオラスに話を振り、それがリテイシアに回ってくる流れだった。だが、ある話題が終わって、朔は直接彼女に声をかけてきた。

「なあ、気になってたんだけど、前髪切った方が可愛いと思うぜ？

邪魔だろ？」

朔の言葉にマオラスの眉が小さく動き、リテイシアは動きが止まった。酷い辱めを受けた気がしたのだ。コンプレックスを刺激された彼女は朔を睨む。

「嫌よ。私は醜いもの。人に見せられる顔をしていないの。お母様の言いつけでもあるし。貴方たちだって醜いものを見て生活したくないでしょ？」

完璧な拒絶を感じているのかいないのか。朔はあっけらかんとした様子で言葉を返す。

「でも、風呂場で見た時、可愛いと思ったぜ？ 君は自信を持った方が良い。なあ？ マオラス」

朔がマオラスに同意を求めた。この時、リテイシアは全身が耳になった様な気さえした。彼が頷いてくれれば、少しは自分の顔を好きになれそうな気がする。朔には失礼だが。

「好きにすれば良いだろう。私には関係ない」

氷の様に冷たい眼差しに声。そのまま、食事を終えたマオラスは食堂を出ていってしまった。リテイシアの心に重い衝撃を残したまま。

食事の手が止まってしまったりリテイシアに、朔が申し訳なさそうに言った。流石に朔はすまなさそうな表情を浮かべている。

「ごめんな。でも、俺、お世辞は言わないからさ。思ったことしか言わない。君には絶対ね。だから、さっき言った事は本当だよ」

だが、顔の上げない彼女に優しい声音で言った。

「今日の後片付けは俺がやっておくからさ。部屋に戻って休みなよ」
「ごめんなさい。私の所為で変な空気になっちゃって。でも、私の仕事だから、私ができるわ。準備を手伝ってもらったし、朔こそ、部屋に戻って休んでて？」

言うが早いかりテイシアは立ち上がり、食器を持って台所へ消えた。食器をたらいに置き、一度に持てなかった分を再度運ぼうとする朔の姿があった。

「これくらいさせてくれよな。じゃあ、また明日。少し早いけど、お休み」

食器を置いてそう言つと、朔は優しくリテイシアの頭を撫でて台所から出て行つた。

どういふ仕掛けか高い所にある屋敷なのにすぐ水が出てくる蛇口がある。珍しいのであまり見たことは無いが、使い方は知っていた。これも魔法だろうか、不思議な気持ちで準備をするときは使つたが、今ではそんな気持ちなんて思い出せない。どうして、こんなに彼の言葉で傷付いてしまつているのだろうか。自分でもわからない。ただ、胸が痛くて張り裂けそうだ。突き放す言葉を辛く感じた。自分を助けてくれたからと、調子に乗つていたのかも知れない。リテイシアの涙が長い前髪にかかる。その髪が無性に邪魔な存在に思えてきた。

リテイシアは衝動的に近くにあつたハサミを手にした。

六話

「なー、マオラス。あんな言い方は無かったんじゃないか？ 酷すぎるぜ」

マオラスは自室にくつつき虫と共に戻っていた。後ろで話している男をまるきり無視して本を開く。また、朔もそんなマオラスを無視して言葉を並べる。

「絶対に泣いているぜ。シア……可哀想に。泣きながら皿洗いつて、本当に可哀想だと思うぜ」

大袈裟に語る朔について堪忍袋の緒が切れたのか、マオラスはやおら立ち上がると部屋のドアを開けた。

「出ていけ。こちらから出ていくのが嫌なら、あちらにするか？」

そう言って、窓を示す。朔はこれ以上は無駄かと、大人しく退散した。

部屋に一人になったマオラスは、大きく息を吐いて瞑想する。すると、脳裏に浮かぶのは、かつてこの屋敷にいた少女。彼女を怒らせたことはあったが泣かせた事は無かった。どちらかというと、何かがあって泣いている彼女を見守ることが多かった。気が済むまで泣かせておけば、翌日にはけろりとしているのか彼女だったのだろうか。

マオラスは“慰め”や“謝罪”という言葉が苦手だ。自分の言葉で傷付いてしまったリティシアに、どんな言葉をかければ良いのかわからない。そういった事は朔の方が得意だろう。いや、朔はそんな状況を作りさえない気がする。普段は邪険に扱っているが、朔の長所も短所も承知している。

マオラスもあんなに突き放すような言葉を言うつもりは無かった。ただ、あの服を着ているリティシアを見ていると上手く言葉を紡げ

ない自分がいたのだ。膨らみは乏しいが少女らしいしなやかな肢体はマオラスの記憶を刺激した。

読書をする気分にはなれない。マオラスは衝動のままに部屋を後にした。

マオラスが台所へ行けば、少女が蹲っていた。身動き一つしないので、眠っているのかと思ってしまうほどだ。自分の足音が聞こえているはずなのだから、何らかの反応があると思ったが予想は外れた。

「おい、何をしている。そのままだと風邪をひくぞ」

近寄り声をかけると、少女はピクリと肩を震わせた。それに何故か苛立ち、声の不機嫌な時のものになってしまふのを止められない。「聞こえているなら返事をしろ。とんだ態度だな」

溜息と共に吐き出した言葉に、リテイシアは弾くように顔を上げた。彼女の透き通った金の瞳がマオラスを映した。初めてまともに見る彼女の顔。どこか違うと思っただら、前髪を切ったようだ。“前髪を伸ばせ”との言いつけを破って。夕食の時にそれを守ろうとしながらも帰ろうとしないということは、彼女の母親はすでにこの世にいないということか。遺言の様なものだろうに、それを破り、顔をさらしたのだ。彼女は。

朔が勧めたからだろうか。

マオラスの脳裏に浮かんだ答え。気の利いた言葉一つ言えない自分の言葉などに傷付きはせず、朔の優しく明るい言葉を心に留めたのだろう。彼女は、と。

わざわざ来るのではなかった。馬鹿らしくなり自室へ戻ろうとしたマオラスの足を少女の声が止める。

「ごめんなさい、前髪切りすぎちゃった気がして……。変じゃない？」

少女は俯きながら尋ねてきた。心なしか頬が赤い。後の朔の贅辞を想像しているのだろう。

マオラスはどうしてか面白くない気持ちで少女の顔を見た。胸にこみ上げてくる何かに気付かないふりをし、口を開く。

「褒め言葉でも期待しているのか？」

「違うわ。自分でも驚くほど衝動的に切っちゃったの。追い出したくなっただ？」

「鏡を見れば良いだろう」

それを聞いたリテイシアは困ったように微笑んだ。

「実はね私、鏡を見るのが怖い。貴方ならばつきり言ってくれますでしょ？」

正直に言つと、リテイシアの前髪は斜めに真っ直ぐに切れてしまっている。マオラスは彼女の手にあるハサミを手にすると、言った。

「目を瞑れ。切つてやる」

「え？」

言うが早いかマオラスの手がリテイシアの前髪に触れた。

昼間の時の様に拒否されなかったことを嬉しく思ったりリテイシアにマオラスは気付いただろうか。

リテイシアの瞳が閉じられ、ハサミが髪を切る音だけが台所に二人の耳に入る。

「目を開ける」

魔法使いはそう言うと、リテイシアの前髪を払った。床に髪が散らばる。

リテイシアは自分の前髪に触れてみた。そして、鏡で自分の姿を確認すること無く言った。

「ありがと。上手ね。考えてみれば、前髪の長い女なんて幽霊みたいで気味が悪いもの。切ってしまえて良かったわ」

「昔、何度か切った事がある」

「そうなの？ 器用なのね」

前髪が無くなったからか、リテイシアの表情が明るく見える。マオラスは思わずリテイシアの頬に手を伸ばした。いきなりの事にされるがままの彼女に、絞り出すかのような小さな声である事を囁いた。言い終えると、すぐに台所を後にする。らしくない自分の行動に眩暈がしそうだ。いや、している。早く自室に戻り椅子に座りたい。走りこそしないが、競歩かとも思う速度でマオラスは階段を上ったのだった。

その頃、リテイシアは床にへたり込んでいた。まだ耳にマオラスの吐息が残っている気がする。彼は言ったのだ。「お前は可愛い」と。それがどうしようもなく嬉しくて仕方無い。体が喜びのあまり上手く震えるだけで動かないなんて初めてだ。

「マオラス……」

少女の眩きは静かな台所にとけて消えていった。

七話

高い天井に柔らかなベッド。光が柔らかく差し込む部屋で、リテイシアは目を覚ました。一瞬、自分がどこにいるのか分からなかったが、すぐに思いだした。自分は命を狙われ、それを救ってくれた魔法使いの屋敷で世話になる事になったのだと。

ベッドから出た少女はカーテンを完璧に開け放った。広がる荒野に感動することは無いが、差し込む朝日には感動した。日当たりの悪い場所に住んでいた彼女にはとても素晴らしい事だ。リテイシアは盛大に伸びをした。

朝日を堪能し終えた彼女は、朝食の用意をするために着替えた。寝間着を脱ぎ、衣装棚から部屋着を取り出す。適当に取り出したのだが、それも昨日通りに彼女の趣味にあっていた。昨日のものよりは可愛らしいが、裾と袖にリボンが二つずつあるだけだ。白い生地に水色のリボン。

「誰の趣味なんだろ……」

素朴な疑問。そして、何気なくドレッサーの鏡を見てしまった。すると、見慣れない顔の少女。それが自分だと気付いたが、鏡を見つめていることが出来た。醜いと思いきんでいたが、本当は醜いというものが良くわからないのだ。マオラスや朔の顔立ちは整っていると思うが、美しいというものがどんなものか説明しろと言われればそれも難しい。リテイシアの容姿に関する思い込みが少し改善された。

前髪は上手く切られており、そうしたマオラスの事を思い出す。そして、鮮明に思い出せる囁きに顔が熱くなった。それを忘れるように慌ただしく身だしなみを整え、部屋を出る。すると、階段の所で朔と出会った。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

普通に挨拶した彼女に、彼も普通に挨拶を返した。そして、どちらともなく歩き始め、歩きながらの会話になった。

「今から朝ごはんを作るうと思うんだけど、食べてくれる？ それとも、他にあてがある？」

拒否された時の為に自分から逃げ道を作って話しかけるなんて、性格が暗いと思う。そう思いながらリテイシアは朔に尋ねると、彼はすぐに答えてくれた。

「勿論！ 出来れば、此処にいる間中ずっと君の食事を食べたいな。お願いできるか？」

明るく、だが控えめに微笑んで言われて断れるわけがない。

「こちらこそ勿論よ。マオラスの分はどうすれば良い？」

魔法使いの名前をさらりと出した彼女に、朔は目を丸くした。だが、何かあったのだろうと察し、内心マオラスを見直す。そして、無くなってしまった長い前髪にも彼が関与しているのであるうと予想をした。

そして、朔はにやりと笑みを浮かべた。意外にも、この爽やかな青年はどんな笑みも似合うようだ。良くも悪くも。

「作ってやれば喜ぶと思う！ 俺が毎回連れていくし、料理が出来たらこれを鳴らしてくれよ」

朔が差し出したのは紐のついた小さな鈴。リテイシアはそれを受け取った。

「これ、魔法で鳴らそうと思わないと鳴らない様になっているんだ。

それが鳴ったら食事の時間だつて事が俺にわかるからさ。何か手伝わせたい事とかがある時に使つてくれてもかまわないぜ」

適当に振つてみるが、本当に音がしない。中をのぞいてみると空洞になつている。仕組みは分からないが魔法とはこういう使い方もあるのだと感心してしまった。

「魔法つて凄いのね。それじゃあ、私はこれで。出来たら呼ぶわ。これでね」

朔は書庫へ、リテイシアは台所へ行くので階段を下りた所で一旦さよならだ。鈴を示して言う彼女に、彼は大きく頷いて見せ。

台所へ着くとリテイシアは市場の近くで聞いたことがあるどこかの国の音楽を鼻歌で歌いながら、料理を開始した。

その後、リテイシアは朝食の準備を終えると、言われた通りに鈴を鳴らした。すると、可愛らしい音がしたので驚いてしまう。小さな鈴から可愛らしい音は素敵で、リテイシアはこの鈴を気に入ってしまった。テーブルに昨日と同じ様に食事を用意し、二人が来るのを待ちながら鈴を眺めた。揺らしても音がしない姿も無駄が無くて彼女には魅力的に映る。

「あ、美味そう！」

声がしたので慌てて鈴から目を反らすと、朔はもう椅子に座っていた。マオラスは立ったままで、テーブルの上を睨んでいる。

「ごめんなさい、気付かなくて。マオラス、嫌いな物があつた？」

鈴をポケットにしまいながらのリテイシアの言葉にマオラスは弾かれた様に彼女を見た。だが、何も言わず椅子に座ってしまった。なので、彼女も座るしかない。静かな朝食が始まる。彼女は思い切つて朔に話しかけた。

「ねえ、朔。あの鈴、凄いわね。可愛いし、必要な時にしか鳴らな

いから無駄がないわ」

嬉しそうに言うリテイシアに朔は吹き出した。どう考えても、少女が言う言葉では無い。腹を抱えて笑う彼に、彼女はキョトンとするしかなかった。

「やっぱり、君って面白いな。マオラスもそう思うだろ？」

朔の横、リテイシアの向かいにいるマオラスは俯いていた。そんな彼の震える肩を見た長年の友人である朔は悟る。

「マオラスを笑わすなんて凄いで？　ねえ、無駄が嫌いなの？」

「嫌いというより、無駄の無いものが好きだけ。無駄だって良い時があるもの」

言葉だと大した違いは無いが、生活の中では大きな違い。

後々、リテイシアはこの言葉の所為で色々とからかわれることになるのだが、彼女はそれを知らない。

八話

「おい、ちょっと待て」とリテイシアが呼び止められたのは朝食の片付けを終え、部屋に帰ろうと廊下に出た時だった。声の主はこの屋敷の主で、リテイシアは思わず身構えてしまう。

「お前は鈴が好きなのか？」

「え？」

あまりにも拍子抜けの問いかけにリテイシアはマオラスの顔をまじまじと見てしまった。

「どうなんだ」

「はあ」

力の抜けた返答に魔法使いは眉を寄せる。

「だからどうなんだ」

「鈴つてものを持ったことが無いんでよくわからないけど、この鈴は気に入ったわ」

左手首にある鈴を示して言えば、マオラスの皺は更に深くなった。邪魔になるかと思っただが案外びたりと治まっている。

「そうか。……お前に私の部屋を掃除することを許してやる」

傲慢な物言いだ、認められた気がしてリテイシアは嬉しくなる。思わず微笑んで礼を口にした。

「ありがとう。嬉しい」

「朔の部屋には近寄るな。あいつは人が部屋に入るのを嫌がる。覚えておけ」

マオラスは付け足すようにそう言うと、リテイシアに背を向けて

行ってしまった。その後ろ姿を見送っていると背中に人の気配を感じ、振り返ると朔の姿。

「何でポーっとしてたんだ？ 熱？」

額に温かい朔の手が触れた。少し間、額にとどまり、その手は頬に下りてくる。そのまま頬をつままれてしまった。その手は冷たくて心地良い。

「熱は無いな」

「何してるの？」

「柔らかくて気持ち良いぜ？ なあ、前髪切ったのって、マオラス？」

「そうよ。上手でしょ」

前髪押さえながら言うリティシアに、朔は笑みを浮かべて言う。

「やっぱり、マオラスか。よく似合ってる。マオラスは凄いな。やっぱり、愛は偉大だ……」

最後の呟きにリティシアは朔を見つめてしまった。恋だとか愛だとか、リティシアにはよくわからない。唯一、家族の愛情は知っているがそれも最後に触れたのは大分前になる。

「で、これからマオラスの部屋に行くのか？ マオラスは何でも自分でやるから、仕事を見つけてるのが大変だろうけど頑張れ」

どう言葉を返せばいいか考えていると、朔は言った。それにリティシアは返す。

「ありがとう。それじゃ、昼食の時に会いましょう」

「楽しみにしてるぜ」

朔はリテイシアの頭を撫でて、歩きだした。また書庫に行くのだろうか。書庫はとても広く、彼女に与えられた部屋の二倍はあった。魔法使いの屋敷にあるというだけで、とても貴重な書物がありそうだ。

リテイシアは歩きだした。階段を上り、初めて足を踏み入れる三階。胸が高鳴るのはどうしてだろう。緊張と心地良い高揚感して、落ち着きなく辺りを見渡す。階段をのぼりきったその先にあるドアは一つだけで、それをノックした。

「いる？」

返事がないので開けてみると、マオラスはいない。ほっとしたよな、残念なよな、よくわからない気持ちになる。そんな考えを振り払うように掃除をしていると、部屋の中にドアがある事に気がついた。

「何だろう……。もう一つ、部屋があるの？」

この部屋にはベッドなどといった生活用品が見当たらないので、寝室に繋がっているのだろうか。手を伸ばし、ドアノブに触れようとした時だった。

「おい！」

振り向くと、立ってこっちを睨んでいるマオラスの姿。何時の間に現れたのだろうか。

「この先って寝室？」

「そうだが、その先には入るな。掃除はこの部屋だけで良い。わかつたな？」

「……わかつたわ」

眼差しは鋭いが、怒ってはいないらしい。リテイシアは素直に従った。

「じゃあ、この部屋を早く済ませちゃうからもう少し待って」「そうか。では、早く済ませろ」

マオラスは淡々と言うと、椅子に座り本を読み始めた。手を動かしながら、その横顔に見とれる。意外に長い睫毛に真剣な眼差し。そして、本を支えている長くてしつかりとした指と大きな手のひら。前髪を切ってくれた時に彼女に触れた時、意外にも温かかったのを覚えている。あの手が触れた女性は何人いるのだろうか。

人の気配が全くしない屋敷だが、彼に恋人がいたことが無い……とは考えられない。無愛想で言葉がきついが、端正な顔立ちをしている。少しでも表情を和らげれば、どんな女性だって虜になってしまうだろうに。鋭い切れ長の瞳は翡翠の様で感情は読み取りにくい。が落ち着いていても綺麗だ。彫りの深い顔立ちで鼻筋も当然の様に通っている。そんなマオラスだから例え彼が微笑まなくても、そんなものをもるともせず近づくと女性がいたかもしれない。彼は自分を助けたことからわかるように、見かけではわからないけど優しい人だ。だから、そんな女性を無碍には扱わず、近くにいれば情も移り恋人として扱うことはあり得なく無い気がする。ただの自分が考えた憶測なのに、悲しくなってしまった。

「おい」

マオラスの言葉に我に返ると、リテイシアは彼を見た。誤魔化すように曖昧に微笑んだりしないのが彼女らしい。

「終わったのなら早く出ていけ。いつまで同じ場所を拭いているんだ」

どうやら、無意識の内に掃除を行っていた様だが、終わっても尚
続けていたらしい。それに気がついたマオラスが声をかけたのだ。
ということは、自分が彼を見つめていた事にも気付いただろうか。
掃除に使った道具をまとめながらちらりと彼の顔を窺うが、変わ
った様子もなく本を読んでいる。リテイシアはほっと安堵のため息
をついた。

「それじゃ、失礼します」

挨拶して部屋を出ると、軽く深呼吸をした。自分はどうしてしま
ったのだろうか。リテイシアは考える。何といても、自分らしく
ないのだ。王妃の監視の目から逃れることが出来て浮かれているの
だろうか。そう考えてはみるものの、違う気がする。だが、他に何
があるかと考えてみても思い当たることは無い。リテイシアは考え
ることを放置して、仕事を再開した。

九話

「はあ……」

その日、夕食も終わり一日の仕事を終えたりティシアは食堂でテーブルに突っ伏していた。この屋敷に来て経過した時間は半月。その時間の中で、今の生活に完璧といかなくても順応することが出来た。この屋敷のマオラスと彼の友人で客人の朔の事をだいたい知るこゝとが出来た。例えば、彼の生活のリズムやパターン、食事の好みなどをだ。何を作っても文句を言わない彼らだが、よく見ていれば好き嫌いが分かる。マオラスは最初は必要ないと言っていたが、三人で一緒に食事をとるのが習慣になっていた。朔は屋敷を出ていく様子は無いし、毎日が楽しい。時折、市場の人たちの事を思い出す。いつかまた会えると自分を無理に納得させている。放置している城の畑はもう荒れてしまっているだろうし、世間の事が全く分からないのが不満というか不安だ。此処にいる限り見つかるとは無いだろうけど、見つかってしまったらどうなるのかという不安もある。

マオラスと朔がする話というのは専門的で、リテイシアにはよくわからない。朔がたまに外の話をしてくれるが、彼自身興味が無いのかさりと済ませてしまう。

「どうしたの？ 溜息なんてついちゃってさ」

声が聞こえたかと思えば、後ろから朔がのしかかってきた。こんな風にスキンシップが出来てくくらいには親しくなった。朔は最初から触れ合いが激しかったが、最近はさらに激しくなった。

彼もマオラスも自分の醜い顔を気にしない良い人だと、彼女は思っている。

「ちょっと、疲れちゃって。早くどいてくれる？」

そう言えば、あっさりと背中の中は温もりは無くなってしまふ。朔は優しく明るくお日様の様に笑う人だ。マオラスは冷たい月の様な人で、正反対なのに仲が良い。よく分からないが、朔も魔法使いなのかもしれないと、リテイシアは考えている。聞くタイミングが無くて本人に尋ねる事が出来てはいないが。

「なあ、何か悩んでることもあるのか？ 家が恋しいとか？」

隣に座った彼から爽やかに発される言葉は、少し当たっている。王城の畑はもう枯れてしまっているだろうか。時く予定だった作物の種を売ってくれたおかみさんとの約束を果たせそうにないのも気がかりだ。といつても、人の出入りの激しい市場では自分がいなくなつても誰も気に留めていないだろうが。少し寂しい気持ちになつてしまつたが、それを悟らせまいと言葉を返す。

「違うわ。でも、外の世界から遮断されてる感じがして寂しいの」
それらしい理由を述べて、朔を見る。朔は目を丸くしていた。

「君は変わつてると思ってたから、そういう普通の事を言うとは驚きだな」

「悪かったわね。可愛い普通の女の子じゃなくて」
「そんなこと言つてないじゃないか」

笑いながら交わす冗談の様な会話も楽しい。もしばれてしまった時の為に一步引いて接していた市場の人たち。彼ら同士はこういう風に接しているのを見たことがある。それを見て浮かぶ感情を無視していたけど、今なら分かる。羨ましかったのだ。

「朔ってお兄様がいたらこんな風なんだろうなつて感じがするわ」

くすくす笑いながら言うと、彼はきよとした表情を浮かべていた。そして、驚かせた仕返しとばかりにこう言う。肘をついてこ

ちらを見上げる様な瞳は子猫の様に無邪気だ。

「じゃあ、マオラスは？」

「さ……さあ。考えたことが無いから分からない。友達かしら？」

慌てて返すリテイシアに、朔は腹を抱えて笑った。涙さえ浮かべているその姿に、リテイシアは唇を尖らせる。

「じゃあ、俺はもう少し調べ物をしてから寝るから。眠ろうかと思っただけど、こんなに笑ったから眠れそうにないんだ」

さらりと言って、リテイシアが言葉を返す前に朔は食堂を出ていってしまった。逃げ足の速い彼に苦笑し、リテイシアも部屋に戻ろうと食堂を出る。その時だった。黒衣の魔法使いが壁にもたれかかる様にして立っていた。

「楽しそうだったな」

責める様な口調に思わず、先ほどのからかわれた事を思い出す。

「何がそう見えるのよ。朔は楽しそうだったけど、笑いのネタにされた私が楽しそうに見えるのなら眼鏡を作った方が良いわ。それが、病院ね」

思わずきつと睨みつけて言うと、マオラスは近づいてきた。リテイシアが思わず後ずさると、その間も詰めてきて壁に追い詰められてしまった。

「今夜は来るのか？」

怒鳴られるかと思ったりリテイシアは瞳をぎゅっと瞑ったが、降ってきたのは意外な言葉。

「特には決めてないけど……良いの？」

「お前の好きにしる。もし、来るなら飲みたい茶を持ってこい」

「わかったわ」

リテイシアが空いた時間をマオラスの部屋で過ごすことが多くなつたのも、大きな進展だろう。といっても、これといって何かするわけでもなく一緒に時間を過ごすだけだ。最近の朔は、殆どの時間を使って書庫で調べ物をして出てこない。マオラスは聞き役としては最高だった。

「では、先に行くぞ。 待っている」

振り返り際にそう囁いて行ってしまふ魔法使い。低音が彼女の耳を刺激し、甘美なものになって心に染みいる。彼の背中を見つめていると心からこみ上げてくるものの名前を知りたい。

「じゃあ、茶葉を探さない」と

呟きながら、食堂へ戻り台所で湯を沸かす。紅茶の淹れ方はマオラスが教えてくれた。カップを温めて、お湯は人数分。自分の飲む分はマオラスの部屋で淹れるので、これは朔の分だ。書庫に湿気は良くないが、紅茶を飲むくらいなら許されている。

「蒸らし時間とか馬鹿みただけで、手間をかけると美味しいのよね」

ポットを眺めながら呟く。

蒸らし時間なんて気にした事が無かった。気にするには、時間に余裕がないといけない。時間に余裕があるということは、お金にも余裕があることが多い。リテイシアを始め、市場の人々はどちらにも当てはまらなかった。どんな安物の茶葉でも手間をかければ、とても美味しくなる。だが、それを知っている人も実行する余裕がある人もいなかった。この屋敷で過ごす時間は、リテイシアにとって母親が死んで以来の“のんびり”としたものだ。家事という仕事はあるが、気持的に余裕があるからかのんびり過ごせる。

移動時間を計算に入れると蒸し時間が丁度良い時間に、カップの

湯を捨てる。それをトレイに乗せて、書庫へ向かった。芳香がリテイシアの鼻腔をくすぐる。

静かな廊下に響く自分の足音を聞きながら、まだ手の届かない場所にある書庫のドアに目をやった。少し開いていて、光が漏れている。その光は魔法で生み出したもので、燃料がいらなくて経済的だと話しているのを聞いたことがあった。

「意外と勉強熱心よね」

失礼なことを呟きながら半開きのドアに近づき、足で開ける。行儀が悪いが両手がふさがっているのだ。目を瞑る。

「朔、紅茶を淹れたんだけど、飲む？」

入ってすぐの所にあるテーブルにトレイごとカップを置いて、朔の姿を探す。すると、姿は見えないが返事が返ってきた。

「おー、ありがとう。後で冷めないうちに飲むな」

「飲んだらそのまま此处に置いておいて。明日、片付けるから」

拍子抜けするほど明るい返事を聞いて、リテイシアは茶葉の入った缶を持って書庫を出た。走り出したいのを堪えて、一步一步心がけてしっかりと歩く。でも、気持ちは足をどうやったら走らずに且つ早く動かせるかに注がれている。

そんなこんなで短いはずなのに長く感じる廊下を階段を経て、リテイシアはマオラスの部屋の前に到着した。深呼吸してドアを叩く。

「ああ、入れ」

ドア越しに声が聞こえ、ドアノブを握ることさえもどかしく思いながら入室する。

「今日は何の茶葉を持ってきた？」

ソファに腰かけたリテイシアの腕の中にある缶に目をやりながら、

マオラスは尋ねた。

「字が読めないから外国のものかしら。でも、この前飲んだ時とても美味しかったから、これにしたの」

「そうか。俺と嗜好が似ているな。俺も好きだ」

マオラスはそう言いながら立ち上がると、リテイシアに手を差し出した。缶を渡せと。

二人で紅茶を飲むときは、専ら彼が紅茶を淹れる。リテイシアは淹れたいと言える程の腕では無い事を自分で承知しているので、彼に甘えることにしていた。だが、いつかは彼に美味しいと言わせてみたいので、先ほどの様に朔に紅茶を淹れているというわけだ。いつもなら感想をもらうまで待っているが、今日は待てなかった。朔は変な所直直なので、不味いと最後まで飲みきらない。それを目安にすることもある。明日が楽しみだ。

「ほら、入ったぞ」

「ありがとう」

カップを差し出され、慌てて受け取る。紅茶通（リテイシアにはそう見える）の彼らは、ストレートでしか飲まない。なので、リテイシアもそれに倣っていた。砂糖などの必要が無いほど、美味しい紅茶だからかもしれないが。

リテイシアは火傷しない様に恐る恐るカップに口をつけた。そして、数拍の後に満面の笑みを浮かべ、マオラスを見る。

「美味しい。本当に上手ね」

「お前がそう言うつと、余計に美味くなる気がする」

リテイシアは体温が急激に上がった様な気がした。それを誤魔化す様に紅茶を飲む。爽やかな甘みと清々しい後味を楽しむ余裕を取

り戻さなくては。マオラスの方をちらりと見てみれば、本を読み始めていた。背が高いのに姿勢が良い。ランプの様なものが部屋の中を照らしているが、それはあくまで媒体の様な物でそれに触れても熱くもなければ冷たくもない。いや、熱を持たないのでどちらかといえはひんやりと金属独特の冷たさを感じる。

「そついえば、お前の母親の話を聞かせてくれ。この前、途中で終わってしまっただろう」

リテイシアの視線に気付いたのか、マオラスが本を閉じて言った。彼女の座っているソファに椅子の向きをあわせながら。

「どこまでお話ししたっけ？」

母親の話をするのは好きだ。父親の事や育った環境について話するのはあまり好きではないが。それを察したのか、マオラスは母親について尋ねてくるようになった。

「お前が今思いついたことを話せば良い」

「それではお言葉に甘えて。」

お母様は体が弱いのかというか、だからこそかしら。したい事は思い立った時になって人だったの。顔に大きな傷があったけどそれを気にせずに、花の様に笑って悪口を吹き飛ばすの。それに、歌が上手くでお母様を思い出すと歌を思い出すくらいに沢山、歌ってくださったわ。マオラスは、歌って好き？ 私は大好き。掃除をしているときとかに、誰もいないと歌う時だってあるのよ。あ、今、笑ったでしょ。失礼ね」

わざと唇を尖らし、上目使いで魔法使いを睨みつける。すると、魔法使いは大きな手で彼女の頭を撫でてくれるのだ。子ども扱いだが、それがとても心地良い。

「そりゃあ、お母様みたいに上手くは歌えないけど、好きこそもの上手なれって言葉もあるくらいだし」

「お前は前向きかそうでないのか、わかりにくい。どっちなんだ？」

「さあ。どっちだと思っ？ 自分じゃ分からないわ。ねえ、後でちゃんと教えてよ？」

「わかってる」

そんなじゃれ合いをしながら、リテイシアは母親についての話をマオラスに聞かせた。彼は、彼女が話すことはなんでも聞いてくれる。だが、興味を示すことは少ない。興味が無いからといって流したりはしないが、興味を持ってもらえた方が良いに決まっている。それが嬉しい少女は、彼が何故興味を持ったのかを考えることをしなかった。どうして、同じことを話しても興味深そうに話を聞くのかを。

ただ楽しい時間をリテイシアは過ごした。そして、先ほどの言葉通り、色々な事を教わった。暇を見つけては屋敷の書庫の本を読んでいた彼女だったのだが、それを知ったマオラスが授業をしてくれることになったのだ。それには、礼儀作法も含まれていた。

十話

「リテイシアー！ 一緒に風呂に入ろうぜ！」

ある日、廊下の窓枠の埃を取っていたら、朔が彼女を呼んだ。いきなりの言葉に驚くが冷静を保ちつつ、言葉を返す。

「また、本の山に埋もれて埃っぽくなったの？ 嫌よ。忙しいの。一人で入って」

いくら掃除をしても、書庫というのは埃がたまりやすい。何を調べているのかよく知らないが、案外ずばらな所のある朔は横着をして高い所にある本を取ろうとし、目的ではない本を降らせるといったことがよくある。そういつた場合、酷い音がするので最初は心配になつて書庫を覗いていたが、最近では無視するようになっていた。食事の時間に出てこなければ、打ち所が悪くて倒れてしまっているのかと駆けつけでもするだろうが今までそんなことは起こっていない。

そして、朔は初対面が風呂が初対面だったからか、何の躊躇いも無しに風呂に誘ってくる。リテイシアも暇な時は応じることもある。年頃の娘として危機感がないと思われるかもしれないが布で肌を隠し、お互いがある程度の距離をとつての入浴は意外と楽しい。朔は自分に女性的な魅力を感じたりしないようだし、リテイシアも朔に異性を感じることが無かった。

「えー、あの風呂つて一人で入ると寂しいんだよー。良いじゃないか。入ろう？」

どう考えても年上の男性のおねだりは可愛くないというのに。それを言葉にして伝えても、朔はやめようとしなない。

片目を瞑って願いを口にするその姿は普通の娘には効果があるか

もしれないが、リテイシアには皆無だ。

「じゃあ、マオラスを誘えば？ あの人も入浴自体は嫌いじゃないでしょ」

「いや、マオラスは一人で入りたがるんだよ。何度も誘ったけど断るからさ。たまに、勝手に入るんだけど、そんなことしたら無視されるんだ」

「……そうなの」

思わず、脱力の溜息が出てしまう。手から雑巾が落ちそうになったのを慌てて防ぎ、掃除を再開する。

「生憎だけど今は忙しいし、今日はまだ浴槽の掃除も終わってないの」

「じゃあ、君が風呂掃除をするくらいにまた来るよ」

「……わかったわ」

“諦め”という二文字が頭の中を支配する。自分の返事を聞いてどこかへ行ってしまった朔にまた一つ溜息をささげ、リテイシアは雑巾とバケツを持って家事室に向かった。それを見ていた一人の魔法使いの存在に気付かずに。

家事室にたどり着いたリテイシアは、バケツの水を窓から外に捨てた。緑が一つも無いこの土地に水をかけても、すぐに蒸発してしまう。暇なときはそれを見るのも楽しかったりするのだが。

「じゃあ、次は二階の廊下……って、マオラス。どうしたの？」

必要な物を持って振り返ると、マオラスが腕を組んで立っていた。いつもの様にとても偉そうに威圧感を漂わせて。何か用かと思いきい掛けても、形の良い唇を真一文字に結んで入口に立ったままだ。

ともすれば、殺気に繋がりそうな氷の眼差しを受ける。彼が見た

目ほど不機嫌で無いことが分かりだした最近だが、これだけは慣れることが出来そうにない。息が詰まり、上手に息が出来なくなる。

「お前はあいつと風呂に入るのか？」

ふと、マオラスの視線が和らいだ。尋ねる声は意外に小さく、何かを恐れている様に聞こえた。

「あいつ……ああ、朔のこと？ ええ。初めて会ったのが風呂場だったからかしら。結構気さくに誘ってくれるの」

何も後ろめたいことは無いと、敢えて明るく言葉にする。「ここで焦ったり誤魔化したりすれば、マオラスは良く思わないだろうから。

リテイシアは首を傾げて、言葉を重ねた。

「私、兄とか弟とかいたことが無いからよくわからないけど、朔ってそんな感じよね。それに、朔が言ってたわよ？ 本当はマオラスと入りたいけど嫌がるから、仕方なく私を誘うって。寂しがり屋なのね」

「お前は……」

マオラスが言葉に詰まる。何と云えば良いかわからないという様な表情を浮かべ、最後にはため息をついた。

「もう良い。とりあえず、風呂に入りたいから早く用意をしる。今すぐだ」

「わかったわ。少し待ってね」

体を動かし、マオラスはリテイシアが通れるように場所を開けてくれた。だが、彼女そこを通り抜けようとした時、腕を掴んだ。

「何？」

腕を引かれ、黒い布が目の前に迫る。気付いた時には、彼の腕の中にいた。手からバケツが落ち、乾いた音をたてる。

リテイシアの頬が布越しにマオラスの胸板を感じ次第に黒衣に温もりを感じ始めたが、それが自分のものか相手のものか判別がつかなくなるくらいに時間、二人は動かなかった。

「お前は誘われれば誰とでも風呂に入るのか？」

自分を抱く腕の力の強さが心地良い。低い囁きにリテイシアは、マオラスの顔を見上げた。少し赤くなっている気がする。それが嬉しい。

「誰とでも入るわけじゃないけど、ここの風呂って一人で入るのが寂しいって思えてしまうの。だからってわけじゃないけど……」

詰問口調でないからこそ、上手く誤魔化せない。マオラスはリテイシアの髪を撫で言った。

「じゃあ……俺が誘えば入るか？」

「え、嫌」

思わず考えるよりも先に言葉が出る。朔だと上半身裸でも何とも思わないが、マオラスだと想像しただけでなんだか気恥ずかしい。自分の肌を見せると思うともっとだ。

その答えが気に入らなかつたのか、マオラスの眉間の皺が深くなつた。それに気付いたりリテイシアは、慌てて言い繕う。

「私とじゃなくて朔と入ってあげて。それじゃ、今すぐ用意するか……」

体を離そうとするが、特に力を入れているわけではなさそうなのにビクともしない。力のかけ方が上手いのだろう。痛くもない。

「あの、マオラス？」

「黙れ 今日のプロ業は中止だ」

聞き返すより早く、氷の様な瞳が目前にあった。緑がかった黒髪がリテイシアの頬をくすぐる。そして、額に柔らかな温もりを残し、マオラスは体を離れた。すぐに歩いてどこかに行ってしまったが、耳が赤い事が見て分かる。リテイシアは小さく笑った。そして、額に手をやる。前髪を切ったから、彼の顔がよく見えるようになった。それだけに限らず、何もかもが彼女の瞳に正確に映る。醜い自分を晒しても、この屋敷の主も客人も態度を変えることは無かった。二人とも容姿に恵まれているので、他人には求めないのかもしれない。自分を醜いと笑った一番上の姉と王妃の顔を思い出してしまう。優しく手を差し伸べたかと思えば、笑顔を浮かべて振り払われた時の絶望感。彼女たちも美しい顔をしていた。

残像を振り払うように頭を振って、リテイシアは風呂場へ向かう。先ほどまでの浮かれていた気持ちが嘘の様に冷めていった。

「シアー、どうした？」

リテイシアが無心で掃除をしていたら、朔の声。手を止めず、視線も床に固定したままで彼女は答えた。

「掃除だけど？ まだ、終わってないからもうちょっと待って」

「じゃあ、終わったら一緒に風呂入ろうぜ。俺も手伝うからさ。何すれば良い？」

「見ての通り私は脱衣所の床を拭いてるから、朔は棚を拭いてくれる？ 右端の棚がまだなの」

「りょーかい。腕が鳴るぜ」

朔の笑顔が眩しい。リテイシアもつられて微笑みを作ると、雑巾をバケツの中の水に浸した。最近出来たあかぎれに痛みをもたらす

が、冷たい水が今日はなんだか気持ち良い。

「終わったよ、シア」

雑巾を示して微笑む朔に声に、雑巾を受け取った。右手のバケツが少し重くなる。右手のバケツが少し重くなる。

「先に入ってて。これ、片したらすぐに帰ってくるから」

「わかった。待ってる」

朔がさつさと脱ぎ出したので慌てて脱衣所を出る。幾ら共に風呂に入っても、脱衣所を共有した事は無い。どちらかが先に出るのが暗黙の了解になっていた。

リテイシアは急ぐ気にもなれず、のろろと歩く。体を動かすのが億劫で、バケツが段々重みを増しているような錯覚さえ覚えた。視界がぼやける。腕の力が抜け、バケツが廊下に転がった。絨毯が色を濃くする。

「どっしょよ……」

手を伸ばしてバケツを拾おうとしても、足がだるくて動けない。それでも、動かそうとすると膝をついてしまった。焦っているのに、どこかで冷静な自分がのんびりと状況観察をしている。視界が暗闇を支配し、意識が遠のいた。

十一話

ベッドの中でリテイシアの瞳が光を映し、一番に目にしたのは天井だった。少し視線を動かして窓を見ればカーテンが閉まっているので、夜なのだろう。

何も考えずに腕を伸ばしてみると、柔らかい物に触れた。次はそちらに視線をやると、人の頭があった。綺麗に波打つ緑があった黒い髪だ。ベッドの隣にある椅子に腰かけ伏せている所を見ると、眠っているように見える。

「マ……オラス……？」

体を起こし彼の名を呼んでみるが、声が掠れて上手く音にならなかった。だが、彼の頭は高度を取り戻し、透き通った水の色をした瞳が彼女を見つめる。

「わたし……し、ど、した……の……？」

マオラスは答えず、水の入ったグラスをリテイシアに差し出した。彼女はそれを受け取るとゆっくりと飲み干し、もう一度口を開く。

「私、どうしたの？」

喉が潤ったお陰で滑らかに声が出るようになった。

「熱っぽいと思っていたが、そんなになるまでどうして我慢したんだ！」

声は決して大きくないが、地を這うように低い声が怒りを如実に表していた。思わず身を竦め、布団を引きよせてリテイシアはマオラスを見る。そんな様子の彼女に、マオラスは大きく息を吐き出した。

少女は屋敷を追い出されることを覚悟した。体調管理もろくに出来ず、迷惑をかけてしまったのだ。仕方ない。

次にマオラスが発する言葉をちゃんと聞きとろうと、全身が耳になった様な状態のリティシアに彼は言った。

「心配をかけるな。もう、体は辛くないか？ 丸々三日寝込んだんだぞ。朔が粥を作ってやると言っていたから、体が受け付けるなら……っ！？ どうした。辛いのか？」

マオラスがぎよつと言った。彼の視線の先には、涙を流すリティシアの姿。肩を震わせ、声もなく泣いている。

「辛く……ないけど……、嬉しくて……。追い出さないの？ いらないうって言わないの？」

「お前……」

ぎこちなくリティシアの肩をマオラスは抱いた。彼の胸板に、彼女の頭が触れる。彼の匂いがリティシアを落ち着かせていく。彼女の目尻にまだ残っている涙をマオラスが唇で拭い、気付いた時にはお互い赤面。だが、肩に置かれたマオラスの腕の力は緩まず 逆に強くなりリティシアを抱きしめた。

「お前は此処にいてくれるだけで良いんだ。逆に頼む……いなくならないでくれ」

耳元で囁くマオラスに、しっかりとリティシアは頷く。

言葉の無い時間が続いた。感じるのはお互いの鼓動のみ。この世界に自分と相手しかいないと錯覚してしまいそうな程、静かだったが、その静寂はいとも簡単に破られるのだった。

「おーい、元気になった？」

能天気な朔の声に、二人は慌てて体を離す。そのタイミングで彼

が部屋に入ってきた。

「大丈夫か？ 中々風呂に来ないから、心配したんだぜ？ ふやけるくらい風呂にいたんだ。で、流石におかしいと思つて出て君の部屋に行ったら、マオラスが君を看病しててさ。色々驚かされたよ」

ぺらぺらと喋る男に、リティシアは尋ねた。

「ずっとマオラスがついててくれたの？」

「そうだよ。な、マオラス」

先ほどの勢いで立ち上がったマオラスの背中をばんばんと叩いて、朔は愉快そうに続ける。

「君、中々目を覚まさないから、心配してさ。君の顔色は段々良くなっていてるっていうのに、逆にマオラスの顔色が悪くなっていったんだ。食事も君の側でとって、眠るのも君の側で。愛だよな」
しみじみと言う朔にマオラスが拳骨を入れた。だが、一向に氣にした様子は無く朔は笑う。それを見ていたリティシアは笑ってしまったが、ある事に氣がついて顔色が変わった。

「じゃあ、三日間、掃除とかしてないの？」

簡単に三日といつても、掃除をしないと埃は溜まる。そんなリティシアに朔は言った。

「君は働き過ぎなんだから休まないと。それに、本当はこの屋敷、掃除の必要なんでないんだ」

「は？」

朔の思いがけない言葉。リティシアは反射的に聞き返してしまっ

た。だが、朔は答えず、マオラスの肩に離すのを促すように手を置いた。マオラスが先ほどまで座っていた椅子に再度、腰をおろす。

「この屋敷は私の魔法で掃除されるようになってるんだ」

リテイシアの頭の中ではパニックが起こっていた。だが、本当に自分には必要ないではないか。それだけは漠然ながら分かる。

「じゃあ、私……本当に……」

思わず啞きが漏れる。

「マオラスはシアが気にするだろうから、その魔法を一昨日まで解いてたんだぜ。でも、熱出して負担になってるみたいだから、また施したんだ。な？」

朔に同意を求められたマオラスが口を開く。

「私はお前に……いや、すまなかった。だが、お前は無償でこの屋敷にいると言われれば出ていってしまうだろう？」

「俺、シアの作った料理食べたいし、まだいてやってくれよ。恩返しでも何でもいいから、マオラスの為に」

男二人に言われ、リテイシアは頷くしかなかった。だが、一つだけ腑に落ちない。でも、それを今、口にするのは憚られた。黙ってしまったリテイシアに朔が尋ねる。

「腹ごしらえしないとね。今からお粥作ったら、食べれるかい？」

優しい声で尋ねられリテイシアは笑顔で頷いた。それを確認し、朔は次にマオラスに言う。

「じゃあ、マオラスも部屋に帰って一旦休めよ。な？」

そうして、朔が半ば無理やりマオラスの肩を抱いて部屋を出ていった。一人になった部屋の中でリテイシアは大きく息を吐き出す。

広い部屋に静寂が訪れ、考える時間を与えてくれた。

「どうして、そんなに良くしてくれるの？ 私はマオラスに何もしてないのに……」

言えなかつた言葉を呟く。

言葉こそきついが、マオラスは自分を気にかけてくれる。彼の行動に見え隠れする不器用な優しさ。それに気付いてしまっているリテイシアは、彼のことを考えるだけで自分の鼓動が速くなるのを感じた。

「はあ……本で読むか、話で聞くだけだと思つてたのに」

いずれ政治の道具で嫁がされるか城の端で人生を終えるかの、二択しかないと思つていた自分の人生。今、リテイシアはそのどちらの延長線上にもいない。そして、予想もしなかつた心の温もりを知つた。

城下の娘たちが話していた恋の話が頭をよぎる。気が向いた時に行つただけの公園で日向ぼっこをしていれば、自然に耳に入つてきた。周りで誰が聞いているか気にしないくらい夢中なお喋りというものをしたことが無いリテイシアには、それが眩しかった。だが、木漏れ日の中で楽しそうな少女たちは可愛かつたが、自分は可愛くない。

「無謀かな……」

ぼつりと呟いて、自分の手を見る。あつたはずのあかぎれが無い。

「え……？」

驚いて、凝視するが傷が無くなっている。その時、部屋のドアが開いて朔が戻つてきた。

「あ、マオラスが薬塗ってたから、治ったんだと思う」
朗らかな朔の声が説明してくれる。彼はそう言いながら、トレイに乗せ皿に盛られた粥を差し出し微笑む。

「凄いのね」

煮込まれた粥は食欲を損なわない程度の外見を保ち、リテイシアの腹を鳴かせた。渡されたスプーンでそれを口に運ぶ。それを見て、朔は言った。

「マオラスの薬はこの世界で一番よく効くんだ。それに、君の熱は疲労からくるものだったから、薬を溶かした水を飲ませてた」

朔の料理の腕に対する感想だったのだが、そうとは受け取らなかったようだ。だが、自分が褒められたように嬉しそうに朔は話した。リテイシアが食べた粥は出汁がきいていて、とても美味しい。細かく刻まれた野菜は食感を少しだけ残し、薬草をすりつぶしたと思われる黒い粒は変な味はしなかった。

「さっきの言葉は、貴方の腕を褒めたのよ。マオラスの薬も凄いわ。けど、今の私には食事の方が魅力的なもの。とても、美味しいわ。ありがとう。料理、得意だったのね」

笑顔で賛辞を口にする、朔は照れたように微笑んで頭に手をやった。

「どういたしまして。喜んでもらえてうれしいぜ。良く噛んで食べてくれよな。でさ、君とマオラスは付き合うのか？」

ベッドの脇に置いてあった椅子に腰かけ、朔は尋ねた。言われたとおり、粥をよく噛んでいたリテイシアはそれを吹きだしそうになった。慌てて飲み込み、反論する。

「あり得ないわよ。マオラスがそんな事を言ったの？」

「いや。でも、雰囲気に分かるじゃないか。そうか。勘違いか……」

しゅんとした朔に何も言えず、リテイシアはまた粥を食べ始めた。そんな彼女に、朔は言葉を続ける。

「それにしても、マオラスの心配は凄かったなあ。君のお母さんが虚弱体質だったから、それを受けついだのかもしれないって言うってさ。君が熱を出すまでも、結構気にしてたんだぜ」

「え……？」

リテイシアの手が止まった。何故、母の事をそこまで知っているのだ。自分の話したことのない事まで。何故……。

茫然として目の前の粥を見つめるが、朔はそれに気付かずと言った。

「君って本当によくミリティアに似てるな。その服もよく似合ってるし、母親似だな。マオラスもミリティアの部屋をそのままにした意味があつたって感じ」

「朔は……私のお母様のこと知ってるの？」

「ああ。昔、この屋敷にいたことがあるよ。もしかして、聞いてない？」

足元が崩れていった気がした。答えなきゃいけないのに、目の前が真っ暗で口の中がからからになって言葉が発せない。

「あ、もうお腹いっぱいになった？　じゃあ、片付けなきゃな」

小さく頷いたリテイシアにそう言って、朔は部屋を出ていった。部屋に一人残されたリテイシアは顔を膝に埋めた。

魔法使いは自分の自慢の母親と恋仲だったのだろうか。今すぐに

でも彼の部屋に行つて尋ねたいが、それが怖い。自分を抱きしめた頼もしい腕は、自分以外の人を欲していたのか。宝石のように美しいあの瞳が映していたのは、自分では無いのではないか。

「マオラス、お母様の事を沢山、聞いてくれたものね」

何も考えずにただ嬉しいと話をしていたが、昔の恋人を思い出していたのではないだろうか。自分はそのよりしろなだけで……。それで全てに合点がいった。

それだと、マオラスが親切だったことにも説明がつく。

「マオラス……」

どうしてこんなにも胸が痛いのだろう。他の誰に酷い事を言われなくても、こんなに痛くなつたことは無い。目の前が真っ暗になる絶望感。リテイシアはすっかり打ちひしがれてしまった。

十二話

マオラスは寢室で眠りについていた。だが、自分を呼ぶ声で目を覚ます。朔が自分の名を呼びながら、ドアを叩いているのだ。寝ついたばかりだったマオラスは溜息をついてベッドからおりた。ドアを開け、強い瞳で朔を見据える。

「何だ。お前が休めと言ったから、お前に私を起こす権利があると

「
だが、朔の様子がおかしい事に気付き、視線の強さを弱め言葉を切る。」

「どうした。何かあったのか」

自分が出せる一番穏やかな声で問い掛けると、朔は口を開いた。いつも飄々とした彼がこんなにも焦っているなんて、珍しい。

「もしかして、シアにミリティアの話をしてなかったのか？ 話した途端、様子がおかしくなったんだ。てっきり話してるものだと思つたから。マオラスから何か言つた方が良い気がするんだ。休んでたところ悪いけど、フォローしてきてくれよ」

早口で言つて朔は頭を下げた。マオラスは深くため息を一つ吐き出した。

「だが、何故そんなこと気にするんだ。ミリティアの事を話してなかったからといって、特に問題もないだろう」

「マオラスはそう思うかもしれないけど、女の子はそうじゃないんだよ！ とにかく、早く！」

マオラスはよく分からないまま、言われるままにリティシアの部

屋へ向かった。ドアをノックすると、小さな声で返事。軽く深呼吸してから、部屋に入る。

ベッドの上で体を起こしていたリティアは部屋に入ってきた彼を見て、ぎこちなく微笑みを浮かべた。

「どうしたの？」

「いや、朔から話を聞いたか？ ミリティアの事なんだが……」

「ああ、お母様のことね。マオラスが知ってるなんて思わなかったから、驚いたわ。この部屋をお母様が使われてたのよね？」

嬉しそうに言うリティアに、マオラスは安心したように笑みを作った。

その笑みを見た彼女が憂いを帯びた表情を見せたが、母親の事を思い出したのだらうと気に留めなかった。

「それでね、マオラス。私は体調が回復したら、出ていくわ。いつまでも迷惑かけるわけにはいかないし……。何より、家が恋しくなっちゃった」

マオラスの表情が固まった。次第に表情が無くなっていき、彼女の肩を衝動のままに掴んだ。

「いなくなると言ったのはさっきのことだろう。どうしてそんな事を言うんだ……？」

「お母様の話を聞いたら、家が恋しくなっちゃったのよ。そう言ってるじゃないっ!」

リティアが叫ぶ。そして、一息おいて口を開いた。

「それに、こんな辺鄙な場所にずっといるわけじゃない。しつこくしないで」

「……そうか。お前は此処が嫌になつたんだな？」

マオラスの絞り出したような苦しい声に、リティシアは顔を背けて言った。

「ええ。あと、出来れば早く部屋を出ていってもらえると嬉しいんだけど？」

「……わかった」

彼女を今すぐ抱きしめ問いただしたい欲求にかられたが、必死に抑え部屋を出ていこうと背を向けた。だが、これだけは言っておこうと足を止める。

「完全に回復するまで今まで通りでいてくれ……」

「貴方が言うならそうするわ」

いつもと変わらない調子の声がマオラスに届いた。それ以上は何も言わず、彼は部屋に戻った。

マオラスがいなくなつた部屋の中。彼の気配が遠のくのに反比例するかのようリティシアは激しく泣き出した。涙が後から後から頬を伝う。自分はとても恩知らずな女だ。彼は軽蔑しただろう。だが、自分を見てもらえないのに側にいるのは辛すぎる。とても優しい人。きつと、自分にミリティアを重ねている自覚なんてないのだろう。それに気付いた時、一番傷付くのはマオラス自身だ。

何より 同情だとわかっているのに、継りつくなんてできない。優しいマオラスは、母親を亡くし厭われている自分に同情したのだ。

「好きなのに……」

伝える事の出来なかつた言葉が、唇から自然にこぼれた。

その夜、リティシアの涙が枯れることは無かつた。亡きつかれて

眠ってしまつまで、いや、眠ってしまったつても涙を流し続けた。

翌日にリテイシアが腫れぼったい瞳を擦り目を覚ますと、枕元に『用がある時は先日渡した鈴を鳴らすように』と書いた紙が置いてあった。それを読み終わり、ベッドから下りる。

「休みすぎちゃったわね」

呟きながら体をほぐした。三日以上の間、眠ったきりだった体は思ったより動かしにくい。体力も落ちてしまっているだろう。衣装棚からここに来た時に着ていた服を取り出して着替え、書き置きに書いてある事を守らないで廊下に出た。そのまま食堂へ向かう。

「あ……」

食堂では朔が何やら煮込んでいた。リテイシアの姿を見つけると、人懐っこい笑みを浮かべる。

「おはよう。早いな。呼んでくれれば良かったのに。もう体は良いのか？ 顔色は良くなってるけど」

咎められるかと思つたが和やかに話しかけられ、リテイシアは自然に微笑んだ。

「沢山、休ませてもらったからもう万全よ。朔は何してるの？」

「ああ、これ？ 朝食だよ。食べる？ 一応、君も食べれる様に消化に良いシチューを作ってみたんだけど」

朔の手の動きに誘われるままに鍋を覗き込んでみれば、ふわりとした湯気に食欲をそそる匂いがリテイシアの鼻腔を刺激した。

「本当に得意なのね。私に何か手伝えることはある？」

「んー、じゃあ、水差しとか用意してくれるか？」

「そうするわ」

いつもとは反対に、朔の指示でリテイシアが動いた。手際良く用意を済ませていると、聞きなれた足音が彼女の耳に届く。思わず顔を上げると、やはりマオラスの姿が食堂にあった。

「おはよう。早く座ってよ。私、お腹がペコペコなの」

にこやかに挨拶をし、言ったリテイシアにマオラスはいつもの様に頷いた。二人の会話を聞いた朔が、台所からシチューの入ったスープ皿を持ってきた。

諸々の準備が終わり、朝食が始まる。リテイシアが倒れた日の朝食の光景と特に変わった所は、見られない。そんな二人を見て、朔はあの後ちゃんと話し合いがされたのだと思った。

朝食が終わり、リテイシアが口を開くまでは。

「マオラスには昨日言ったけどもう体調は万全だし、今日出ていくわ。荷物もないし、すぐ出ていけるから。今までありがとう」

食事前に彼女の服装を見た時に覚悟していたことだ。マオラスは冷静を保って口を開く。

「そうか。近くまで送ろう」

「遠慮するわ。帰り位は自分の足で帰りたいから」

自然に会話する二人を、朔は信じられないと見た。そして、何らかの事を言おうとしたが、上手い言葉を見つけることは出来なかった。ただ、自分の不用意な発言の所為でこうなってしまったことは理解した。

「……俺が街に用事があるから途中まで一緒に行かないか？ 心配なんだ」

そう言うことしかできず、歯がゆさに唇をかむ。それから、三人は無言で己の役割をこなした。マオラスは自室に戻り、朔とリテイシアは朝食の後かたづけと魔法使いの為に朝食を作った。

それらが、全て終わった時に太陽はまだ低い位置にいた。その頃に屋敷を出発した朔とリテイシア。何も言わない朔だったが、一つだけ言った。

「マオラスに何も言わなくて良いのか？」と。それをリテイシアは笑顔で拒んだ。

「もう、言うことは無いから。ねえ、どうやって街まで行くの？随分、軽装だけだ」

朔の視線から逃げるように言うリテイシア。朔はさらりと答えを口にする。

「ああ、普通に行ったら馬鹿みたいに時間がかかるから、魔法を使うんだ。シアはどこに行くんだ？」

「王都よ」

「了解。少し酔うかもしれないけど、しっかり捕まってるよ？」

朔が言った瞬間、いつかも感じた浮遊感がリテイシアを包んだ。慌てて朔の腕を掴む。

そして、この前の同じように気付いた時には王都の外れにいた。リテイシアは朔に深く頭を下げた。

「今まで本当にありがとう。私は行くわね。さようなら」

背を向けて歩きだしたりテイシアの腕を朔が掴んだ。振り返ると、何かを差し出している。布に包まれたそれを受け取ると、軽い。

「今朝、焼いたんだ。食べてくれよ。な？」

「有り難くいただきますわ。これ、大したものじゃないけどお返し」

今着ている服は、此処に来る時に着ていたものだ。いつか買った

種の入った皮袋がある事に気付き、それを差し出す。

「美味しい南瓜の種よ。是非、育ててみて」

「わかった。そうしてみる。……体に気をつけるよ」

「貴方もね」

そうして、リティシアは軽く微笑んで、また歩きはじめた。行き

先は、 王城。

自分は王家とミリティアの血を引いていることしか、価値が無い。そう思いこんだリティシアは、何を考えることなく王城へ向かったのだった。

十三話

城中が大騒ぎになった。

賊に襲われた形跡だけを残し消えた第三王女が無傷で帰って来たのだ。何より驚かせたのが、彼女の整った容姿。髪の色と瞳や声は皆の記憶の中の彼女と一致していたが、顔立ちは醜い物として認識されていた。皆は偽者だと思ったが、王が何も言わなかったので彼女が本物だと認めざるを得ない。

そして、王は余程心配したのか、リテイシアを王城の一室に住ませるように要求したのだ。いつにない王の態度に王妃も折れざるをえず、リテイシアは広い部屋を与えられた。彼女は少し前までは知らなかった礼儀作法を思い出しながら、城の中で振る舞った。さらに暇があれば書庫に通う毎日を過ごす。まるで、何かを忘れる事を望んでいる様な没頭ぶりだ。

それから、リテイシアが城に戻って一月もの時間が流れた。過敏になってしまった王の命令で彼女の周りにはいつも護衛の姿がある。本当は、つい最近まで住んでいた城の外れの小屋の様子を見に行きたいのだが、それも叶わない日々。自分の力でどこまで出来るか試してみたいと言って、教師を望む事は無かった。教師と向かい合うと、あの楽しかった時間を更に思い出してしまいそうで怖いのだ。

「マオラス……」

だが夜になり広いベッドに横たわり、小さな蠟燭やランプの明かりを見つめていると思えば、浮かぶのはあの魔法使いの顔ばかりで。やはり、あのまま身代わりだとわかっていながら側にいれば良かったかもしれない、と思ってしまう弱い自分を叱りつけ無理やり瞳を閉じる。だが、眠りの精は中々彼女の所にやってきてはくれない。ただただ空虚が彼女の心を支配する。

「マオラス……マオラス……」

彼の名を何度も呼ぶと、少し心の寂しさが埋まる気がした。

瞳を閉じても開けても浮かぶマオラスの表情。夢にだって何度も出てきた。決まって最後は、辛そうに彼が離れていく。手を伸ばしても伸ばしても届かず、目を覚ませば枕が濡れていた。

忘れないといけないのに、思えば思うほどマオラスが心から消えない。

ろくに眠りにつくことが出来ない夜が続いた。マオラスの夢を見てはすぐに目覚めてしまうからだ。

「最近、眠れないのではないか？」

父王がわざわざリテイシアを訪問する事が予定の中に組み込まれることになった。王の配慮で、王妃や他の王女がこの部屋に近づく事はない。今までの空白を埋める様に、二人は会話を重ねた。ただ、リテイシアが本音を口にするには少なく、王の話に相槌を打っているだけなのだ。

「気になる本があって気付いたらいつも夜遅くなの」

リテイシアがよく書庫に籠っている事は、王に報告されている。納得したように笑って、彼は言った。

「勉強熱心な様で結構。まだ家庭教師をつける気はないのか？」

いくら王族に名を連ねようとも、賊に攫われた姫となっては他国に嫁ぐ事はかなわない。サルリアの計略は破綻を来した。最低限の教養、礼儀を身につけて国内の貴族に嫁ぐしかない。結婚しないという選択肢もあるにはあるが、それが許される可能性は低いだろう。

「まだ、落ち着かないの。我が儘を言っでごめんなさい。もう少し、静かに過ごしたいわ」

瞳を伏せてそう言えば、王がそっとしておいてくれる事を知って

いるリテイシアはいつもの様にそう言った。

「そうか。わかった。何か欲しい物があれば、侍女に言付けなさい」
「ありがとうございます。お父様」

リテイシアは父親の顔を見ずに言った。数分の後に、大臣に急かされる様にしてリテイシアの部屋を出て行った。

静かな部屋にリテイシアの溜息が広がった。

賊の討伐命令が出されたらしいが、効果は皆無な事は考えなくても分かる。城の者は彼女を腫れものの様に扱うのでどんな話も耳に入りにくい。書庫で侍女が内緒話をしているのを聞いたのだ。書庫にリテイシアがいることを知らないということは、リテイシアの顔を知らない下位の者たちだろう。

「姫様、お茶をお持ちしました」

静かに扉が開き、侍女が入室した。決まった時間に茶を飲むのも王族の義務らしい。今まで知らなかった事が沢山ある。

「ありがとうございます」

そつの無い動きで目の前のテーブルに置かれたティーカップ。黄金色の液体が注がれ、レモンが添えられた。

いつだって紅茶の落ち着いた香りは心を安らげてくれる。レモンを浮かべると色が変わるのも面白い。無意識の内にストレートの紅茶を避けている事に気付かずに、リテイシアはカップに口をつけた

いや、つけようとした。突然の侵入者によって手からカップを叩き落とされたのだ。そうしたのは大きな眼鏡をかけた侍女だった。

「何をするの、この無礼者！ 早く出て行きなさい！ 申し訳ありません、姫様。この者は厳しく叱りつけますので」

紅茶を持ってきた侍女 アンが叱責するが、彼女は頭を下げたまま動こうとしない。

「この者と話がしたいわ。貴女は少し部屋を出ていてくれる？」

「なりません、姫様」

「早く出なさい！ 貴女の意見は聞いていないわ」

珍しく声を荒げる。これでもリティシアは一国の姫だ。逆らっては身の為にならないと、更にリティシアの機嫌を損ねてまで彼女の命を守る忠義を持ち合わせていなかったのだから。アンは静かに部屋を出て行った。それを確認して、動かない侍女に声をかける。

「貴女の名前は？」

侍女は答えない。だが、その彼女の方が細かく震えている事にリティシアは気付いた。

「……った。良かった。姫様のお命をお守りする事が出来て」

彼女は言いながら、顔を上げる。涙で濡れた眼鏡を気にせず続けた。胸で揺れているリボンは、特定の主人がいない事を表す白色だ。

「私はロアナ・ボクスと申します。あの紅茶には毒が入っていたんです。私の様なものが姫様のお目に映るなんてあってはいけない事ですが、姫様をお守りしたくて……！」

椅子から立ちあがってリティシアがロアナに手を伸ばす。叩かれることを覚悟してか、彼女は一瞬身構えた。だが、王女は侍女の眼鏡を取っただけだった。

「拭かなきゃ前がよく見えないわ」

命が狙われたことに関して、恐怖はあまり感じない。目の前で涙を流すロアナが嘘をついている様子にも見えないし、事実なのだろう。

「そんな、いけません！」

「良いのよ。命を守ってくれたお礼だから」

手早く水気を拭って眼鏡を返せば、ロアナは震える手でそれを受け取った。

「あ……ありがとうございます」

眼鏡をかけるのに少し時間がかかったが、ロアナは曇りの無い瞳をリテイシアに向けて、ポケットから小さな銀色の玉を取り出した。

「こ、これは銀で出来ているんです」

いきなりの行動に思わず傾げるリテイシアに、ロアナは手に持ったそれを紅茶のポットに沈めた。少しの時間が過ぎて、ロアナの手のひらに戻ったそれは黒ずんでいた。その時だった。衛兵が部屋に入ってきたのは。

「下がりなさい！」

思わず言ったりリテイシアは衛兵の後ろにいるアンを見つけた。衛兵たちはリテイシアの言葉に耳をかさず、ロアナを連れていこうとする。警備は厳しくなっていたが、室内に入ることを無かったのに。頑なな彼女の望みを聞きいれていてくれたのに。

「か、彼女は私が呼んだの。これから、私に仕えてもらうわ。ねえ、ロアナ？」

頷けと瞳で言えば、彼女は恐る恐る頷いた。

「お父様には私からお話するわ。下がりなさい」

強気で言うとロアナを残して他の者は部屋を出て行った。

王女はホツとして表情を緩める。初めて下した命令はとても彼女を疲労させた。

小さな溜息を漏らすリテイシアの前のロアナは立ち上がると綺麗な礼をし、控えめな笑みを浮かべた。

「姫様、私なんかを庇ってくださいありがとうございます」

乱れてしまったロアナの二房の三つ編みは、編み直さなければ仕事には戻れないだろう。ただ、そんなことは関係なしに彼女は嬉しそうで、勝手に自分の侍女としてしまったことを詫びようとしていたリテイシアだったが口を閉じた。

ロアナは美しい絹糸のような金髪と透き通るような青い瞳の美人である事に、リテイシアは気付いていた。先ほど眼鏡を外した時のように碧眼を晒し、野暮つたい髪形を改めれば人目を引く存在になることは間違い無い。

また命を狙われたというのにリテイシアは妙に冷静だった。

これからどうすれば良いのかを考え始めていた。

「このことを知っているのは貴方と私、それと主謀者たちよね？」

確かめるように言ってソファに腰かける。ロアナにも座るように勧めたが、彼女は頑なに従わなかった。

斜め向かいに立っているロアナは静かに口を開く。

「はい。どの様な毒かお調べになりますか？ 私に伝手があります」

「……やめておくれ。お父様に報告もしない」

自分の命を救おうとした者を信用してしまうというのは当たり前前の事で、リテイシアもそれに漏れずロアナを信用してしまっていた。

「かしこまりました。それで、あの……姫様は何時頃にご起床され

るんですか？」

それから、リテイシアはロアナの質問責めにあつた。

自分に仕えることになつて嬉しくて仕方がないと何度も口にするロアナにリテイシアは戸惑いを隠せなかつたが、理由を尋ねる事は出来なかつた。

十四話

リテイシアが父王に頼み、ロアナが正式に侍女になったのはそれから二日後のことだった。同時に、毒見の為だという事は伏せて、王に鑑賞用の魚もねだった。

第三王女唯一の侍女になったロアナ。自身の容姿に対する劣等感はあるものの他人に対して特に頓着のないリテイシアなので、侍女に対して何か口を出すことはしなかった。ただ、同性の話し相手が出来た事を素直に喜び楽しんでた。マオラスの事を考えて物思いに耽る時間が目に見えて減って行った。それでも、慕情が消えるわけではなく、夜は反動でさらに辛い時間になって行く。

睡眠時間の減少というものは顕著に体に現れ、食欲も無くなって行った。あれから毒を仕込まれる事は無かった。食事を少量与えた魚は死なないし、リテイシアの体にそれらしい不調は現れていない。ロアナはそんなリテイシアを不安げに見つめていた。胸元にある青色のリボンを見ると心が躍るが、主の姿を見ているとその気持ちもしぼんでしまう。リテイシアが塞ぎこんでいる様子は、彼女が以前仕えていた女性が落ち込んでいた時とよく似ていた。どうすれば気分が晴れるのだろうと、身の周りの世話をしながら思考を巡らせる。リテイシアに仕えるようになって自由の時間が増えたので、その間も気がつけば同じことを考えていた。ただ、それを悟れば彼女は気にして悩みを増やしてしまう事になる。付き合いは短いのに、長い時を共に過ごしたかのようにお互いの事が不思議とわかることは不思議なようで当然だと感じていた。

「今日もありがとう。後は自分でするわ」
「かしこまりました」

夕食が終ると大抵リテイシアは一人で時間を過ごしたがる。

そろそろ、信用の出来る護衛をつければ外に出ても問題の無い時期になったと、リテイシアの部屋を辞して歩く廊下で、ロアナは考えた。それは気分転換になるだろうし、年頃の少女を室内に閉じ込めておくというのは頂けない。

ロアナにはもう少し仕事があるが、その前に見慣れた顔を見つけたので近寄る。主に見せるそれとはまた違った安心しきった眼差しを向ける相手は一人の男性だった。ロアナの同年代のこの男性も端正な顔立ちをしている。さらりとした黒髪が廊下の蠟燭に照らされており、温かみがあるロアナの瞳とは違い氷の様な冷酷にも見える瞳は感情が分かりにくい。陰りのある中性的な容貌に薄い笑みを浮かべ、ロアナを見た男性は口を開いた。

「ああ、ロアナ。どうしたんだい？」

腰に簡素な剣を差し、城の護衛兵をしている彼　フィリップの問いにロアナが答える。

「見回り中ですか？　ごめんなさい。あの、また後でお願いしたい事があるんですけど、お時間大丈夫ですか？」

「問題ないよ。それじゃあ、また後で」

絨毯に足音は吸い込まれ、静かに歩いて行くフィリップをロアナは見送った。ロアナとはある事情で侍女仲間の間でもはみ出し者として冷遇されていた。その境遇がリテイシアを似ており、それが彼女への忠誠を強い物としているのは確かであるがそんな単純な話ではないことをリテイシア以外の城の殆どの者が知っている。

また、リテイシアの知らないことだ。

十五話

「殿下の護衛を務めさせて頂くことになりましたフィリップ・レンバと申します。不束者ですが精いっぱい努めますのでお許しを」

目の前に膝をつき少し掠れた声の青年が穏やかに言うのを聞いてリテイシアは手のひらへのキスを許した。手に触れられる事に抵抗が無いわけでは無いのだが、そういうものらしい。

初対面の王族相手だというのに物怖じしないフィリップと対照的にリテイシアの方は戸惑っていた。彼はマオラスとも朔とも違った男性である。

フィリップは独特の鷹揚な雰囲気を感じながらも、瞳には隙がない。ロアナの話から彼女がかなり信頼しているのが分かったので、勝手に彼女に似た雰囲気な男性を想像していたリテイシアは戸惑いを隠せなかったのだ。

「フィリップと呼ばせてもらうわね」

立ち上がったフィリップが光栄だと礼をするのをリテイシアは、不思議な気持ちで眺めていた。マオラスの屋敷で生活していた短い間、彼女は自分の価値を見つけることが出来たような気がしていた。だが、それがとんだ思い違いだと知ってから、一つも自分のものを見つけないことが出来ないうのだ。何もかもが父であるこの国の王から与えられたもので、彼の娘でなければ手に入らないものだ。ロアナだけは自分の意思で仕えてもらう事になったが、彼女の不思議な程の忠誠心も納得がいかない。

「もう一人護衛をつければ外出も許されるそうです。どこか行きたい所はありませんか？」

フィリップが穏やかな様子で尋ねるのをリテイシアはどこか人事のように聞いていた。答えは一つだけだ。だが、それを口にする事

は許されない。

黙ってしまったっているリテイシアの代わりにロアナが提案した。

「お庭は如何ですか？ 少しは体を動かされないと風邪を引きやすくなってしまうから」

少し前まで立っている時間が多かったからか促されないと座る事をしないリテイシアの為に、ソファのクッションが整えられた。勿論、ロアナの手によってだ。リテイシアはソファに腰かけると、隣と向かいに二人も座るように告げる。

警護の都合上かフィリップはドアに背を向けず一番近い場所に、ロアナはリテイシアの隣に腰かけた。

それを確認してからリテイシアは、ロアナの提案について考える。ロアナの入れた紅茶と爽やかなレモンの香りが、思考を冴えさせる気がした。ロアナによって丁寧に結われた赤毛を乱さないように注意しながら、リテイシアは頭に右手をやった。左手は顎に添える。本当に行きたい所へは行けないが、外に行けば気分転換になるのは確かだ。ただ、城内ではその効果は見込めない。

「庭？ あまり人目につく所は嫌だわ」

紅茶に口をつけると思いついていた通りの味がした。そこから連想するのはこれがストレートだったらというものだが、慌てて頭を振ってその考えを追い出す。

いきなり頭を振ったりリテイシアに変な顔をしなかった二人は流石というべきか。

「それでしたら、歌劇場は如何ですか？ 個室の観覧席だと静かで落ち着いた時間を過ごせますよ」

フィリップの提案は貴族の子女が好むものだ。彼は女性が好む甘い顔立ちと声の持ち主である。身分はそう高くないが、影のある眼差しは女性の心をくすぐってやまないだろう。事実、彼はその日の

相手に困ったことは無かった。

そんな彼を第三王女の護衛につけることに否を唱える者もいたが、元より軽視されている王女である。国王が望むのならとさほど問題なく護衛に就任した。

「歌劇場……行った事が無いんだけど、どんな所？」

「歌劇場は舞台劇を見る場所です。悲劇と喜劇のどちらがお好みですか？」

今までのリテイシアがしてきた勉強に歌劇などという芸術的な分類は無かった。悲劇と喜劇の違いは分かるが、どちらが好みかと聞かれるとわからないのだ。物語というものもあまり読んでいない。

リテイシアはロアナに意見を求めようと彼女に視線を向けた。ロアナは相変わらず二房の三つ編みを垂らし、レンズの大きな眼鏡をかけている。分厚いレンズ越しに空色の瞳が喜びを湛えてリテイシアを見つめていた。

「ロアナは行った事があるの？ よくわからないから、貴方の意見を参考にしたいのだけれど」

声をかけられた瞬間、ロアナは普段から伸ばされている姿勢を更に良くした。だが、彼女もそうだったことには疎く、向かいに座っているフリリップに救いを求める様な視線を向ける。物語より実用書を好む傾向がロアナにはあるのだ。

「僕の知っている女性はその日の気分によってどちらを好むかわ変わるそうです。早速演目を取り寄せます。それからお決めになっても遅くはないかと」

「わかったわ。お願いね」

「書庫に歌劇場で演じられている物語を綴った物がありますから、それを参考になさるのも一つの案ですよ」

流暢に説明していくフィリップの声は朗らかで、一編の詞を朗読している様にも聞こえた。

「それじゃあ、後で書庫に行くからついて来て」

「はい！」

「かしこまりました」

リテイシアの呼びかけに、二人はそれぞれの答えを返した。

三人しか存在しない広い室内でそれから少しの間、明るく会話が交わされたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0991w/>

ただ、それだけ。

2011年11月8日03時16分発行